

1,200 Fukushima Mothers Speak

—— アンケート調査の自由回答にみる

福島県中通りの親子の生活と健康 ——

成		元	哲
牛	島	佳	代
松	谷		満

『中京大学現代社会学部紀要』 第8巻 第1号 抜 刷

2014年9月 PP. 91~194

1,200 Fukushima Mothers Speak

—— アンケート調査の自由回答にみる

福島県中通りの親子の生活と健康 ——

成		元	哲
牛	島	佳	代
松	谷		満

1 問題の所在

本稿の目的は、2011 年 3 月の福島原発事故後、福島県中通り 9 市町村の 2008 年度出生児とその母親（保護者）¹を対象にした質問紙調査の自由回答欄に記入されている内容を分類し、その特徴を考察することにある。東日本大震災と福島原発事故により放射能被ばくが広範囲に及び、集団汚染被害が発生し、長期的な健康影響の可能性が出てきた。これにより、福島県中通り 9 市町村の子どもと母親を取り巻く生活環境はどう変化し、この変化に対して、母子はどのような心理的反応を示しているのか。また、放射能汚染に対していかなるリスク対処行動をとっているのか。さらに、これにより、母子の生活の質はどう変化し、健康影響が生じているのか。これらの点に着目して、「福島子ども健康プロジェクト」が2013 年 1 月～5 月に実施した「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」の質問紙の自由回答欄に書き込まれた母親の声を読み解き、その内容を考察する。

まず、自由回答欄に記入した母親の年齢、居住地域の回答数と回答率を

確認しておこう。なお、総回答数は調査票回答者の総数である。今回の調査に回答した 2620 人の 45.8% の約 1200 人が自由回答欄に意見を書いている。その意見の総文字数は約 252,000 字であり、そのうち本稿で取り上げられているのは約 48,700 字である。

【年齢】

年齢層	第 1 回調査（2013 年）		
	回答数	総回答数	回答率
20 歳代	162	464	34.9%
30-34 歳	414	927	44.7%
35-39 歳	434	857	50.6%
40 歳代	180	347	51.9%
50 歳代以上	4	15	26.7%
無記名・その他	7	10	60.0%
全体	1201	2620	45.8%

【居住地域】

市町村名	第 1 回調査（2013 年）	
	記入あり／総回答数	記入割合
福島市	430／881	48.8%
桑折町	22／34	64.7%
国見町	15／27	55.6%
伊達市	68／175	38.9%
郡山市	467／1073	43.5%
二本松市	79／175	45.1%
大玉村	16／44	36.4%
本宮市	54／125	43.2%
三春町	12／34	35.3%
9 市町村外	38／53	71.7%

2 自由回答の分類と全体の概要

自由回答欄には多種多様な意見が寄せられた。本稿ではそれを次の8つの項目に分類した。

【8つの分類項目】

- ①生活拠点
- ②(食)生活
- ③家計
- ④子育て
- ⑤人間関係
- ⑥情報
- ⑦賠償・補償
- ⑧健康

このように8つの項目に分類した論拠を提示しておきたい。原発事故後、福島県中通り9市町村の2008年度出生児とその母親にどのような生活環境の変化が生じているのかという本稿の問題関心から、項目①から⑦までの分類を行った。項目別の具体的な特徴については各論で述べることにして、ここでは分類の論拠を示す。

生活環境は住居をめぐる意識と選択に大きく依存している。生活空間が放射能に曝されることを回避するために避難・移住、保養、除染というリスク対処行動が検討され、実行されている。そこで、生活拠点(分類①)に関する意見を一つのまとまりとして分類した。また、子育て中の親にとって重要な生活上の課題はおおむね、食生活(分類②)、家計(分類③)、子育て(分類④)、人間関係(分類⑤)に大別される。

食生活(分類②)に関しては、他県産の食材や水の購入に関する意見が大半である。家計(分類③)や子育て(分類④)とも直接関連する論点であるが、内部被ばくを回避しようとする対処行動が顕著に見られるその特徴に鑑み、食生活を独立の項目として分類した。加えて、洗濯物の外干し

に関する意見も多く見られた。これも放射能を回避する対処行動であり、生活に関する基礎的な事柄であるため、ここに分類した。

家計（分類③）は、生活環境の変化を経済的側面から明確にする趣旨の項目である。収入と支出を区別した上、支出については費目ごとに整理した。

子育て（分類④）は、子育てに焦点をあて生活環境の変化を記録するための項目である。ただ、子育てに関する意見には、原発事故後の漠然とした不安を含めて、実に多種多様な意見が寄せられている。そこで、原発事故および放射能との関連性が強く、かつ具体的な要素を、遊び、放射能対応（検査等）、出産の3つの項目に分類し、残部をその他の意見として整理した²。

人間関係（分類⑤）は、対人的な側面での生活環境の変化を明確にすべく、人間関係の性質に応じて整理した。具体的には、夫婦・親族、近所・知人、外部、賠償において取扱いの異なる者の4つに分類した。

今回の福島原発事故後の福島県中通りの親子にとって不安やストレスの源泉となり、放射能への対処行動をめぐる親の迷いと苦悩の根源となっているのが情報の不確実性である。具体的には、誰の、どういった情報を信じればよいのかわからないというこの一点に尽きる。こうした放射能不安、リスク対象行動をめぐる苦悩に関する母親の心の叫びのような意見を情報（分類⑥）の項目を設け、「情報不信」と、事故から時間が経つにつれ、日常生活においてどうしても避けがたい「関心の低下」に分類した。

また、原発事故後に行われた賠償・補償をめぐる意見を賠償・補償（分類⑦）に分類した。最後に、現在ならびに将来の子どもと母親自身の健康に対する影響をまとめた。もっとも、健康影響は現段階では、因果関係が定かではないが、母親の子ども現在の健康と将来の健康影響に関する意見を網羅的に取り上げ紹介する。

上記の8つの項目の分類の論拠も重要であるが、他の項目との有機的なつながりもまた重要である。そこで、8つの項目の特徴とこれら全体の傾

向について概観する。

(1) 生活拠点

人間の生活環境は住居などの生活拠点到大きく左右される。2011年3月の原発事故後、アンケート対象者の居住地は、放射能に晒されているという特殊性がある。そのため、アンケート対象者は、後にみるように、生活環境に変化が生じた結果、様々な不安を抱え、何らかの対処行動をとっている。また、その変化が子どもと母親自身の健康認知や苦悩に影響を及ぼしている可能性がある。こうした問題を根本的に解決するためには、生活拠点が放射能に晒されている状態を解消する必要がある。そこで、アンケート対象者は次のような行動を検討し、実行している。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①生活拠点を変更する（避難関係）②一時的に遠出する（保養関係）③放射能を取り除こうとする（除染関係） |
|--|

しかし、いずれも難点があり、アンケート対象者が抱える問題を抜本的に解決するには至っていない。このことを前提として、アンケート対象者の生活環境にどのような変化が生じているのかを具体的にみていこう。

(2) (食) 生活

アンケート対象者は様々な不安を抱えているが、中でも健康に関する不安が大きい。例えば、食による内部被ばくの不安がある。この不安から、地元産の食材や水道水を避けようとする対処行動が生まれる。その背景には、情報不信もある。その結果、家計負担が増加し、経済的な不安につながっている。

また、放射能が洗濯物に付着したり家屋に浸入したりする不安から、洗濯物の外干しを避けているという意見もある。

(3) 家計

アンケート対象者の多くは、家計負担の増加による経済的な不安を抱えている。家計負担の増加は放射能への対処行動によって生じている。

さらに、アンケート対象者の多くは、被害の実態に応じた賠償がなされていない、要するに、家計負担の増加に対する補填がないと感じ、経済的な不安を増幅させ、行政・東電に対する信用不安をも生じさせている。

(4) 子育て

ア 子どもの遊び

遊びに関しては、外遊びをしないことによる運動不足等の不安との葛藤がみられる。室内遊び場や保養の活用にも限界があり、不安を解消することが困難な状況にあり、そのことが不安を増幅させている。

イ 放射能対応（検査等）

検査に関しては、情報不信から、検査やその結果に対する信用不安が生じて、健康被害の不安を増幅させている。

ウ 出産

放射能の胎児への影響が不安視されている。これから子どもを産むかどうかを葛藤しなければならない人や、流産の原因は放射能ではないかという疑念を持っている人が存在する。

エ その他の不安

他の項目で指摘した様々な生活不安（家計負担の増加による経済的不安等）の累積による総合的な不安や漠然とした不安、子育ての大変さなどが指摘されている。

(5) 人間関係

原発事故は、人間関係にも大きな変化を及ぼしている。特に、放射能についての考え方の違いと放射能リスクへの対処行動の違いは、人間関係に重大な影響を及ぼしている。身近なところでは、夫婦・親族との間で、原

発事故後の対処行動をめぐる選択決定に関し、意見の対立による葛藤と摩擦が生じている。中には関係の破綻に至っているものもある。また、近所・知人との間でも、争いを避けるため、本音や不安を口にすることができない、考え方を押し付けられるというストレスが生じている。外部の人との関係では、福島出身者であることによる差別や偏見の不安が多く指摘されている。さらに、原発事故後の賠償・補償の線引きは、自分より優遇されている避難区域の人などに対する差別感情を、半ば無意識に生じさせている側面もある。

(6) 情報

アンケート対象者の多くは、情報不信を抱いている。情報内容の矛盾や情報発信主体に対する不信による。情報不信は、過少・過剰な対処行動の原因となる。これを解消するのは容易ではない。

また、情報不信は、アンケート対象者の関心を低下させ、ふと思い出したときにその関心の低下を危惧する不安を抱かせている。この不安は、人によっては苦痛を生じさせる一方、関心の低下はあきらめを生む。

他方で、福島が忘れられていく不安、あるいは、もっと知ってほしいという声も指摘されている。その背景には、今後も原発事故に遭った福島の子どもなどに関心を寄せ、サポートしてもらえなくなるという不安が伺える。

(7) 賠償・補償

ア 賠償

アンケート対象者の大半は、十分な賠償を受けることができない不安を抱いている。賠償に関する不満は挙げればきりがなほ多い。このように、アンケート対象者は、被害の実態に応じた賠償がなされていないと感じている。この不安は経済的不安を増幅させる。加えて、〈子どもの将来の健康被害について賠償がなされないのではないか?〉という不安を生じ

させる。

イ 社会保障

アンケート対象者の大半は、放射能による子どもの健康被害に対する不安を抱いている。可能な限り健康被害を防止するとともに、早期の発見（および医学的に適切な処置を行うこと）が期待されている。具体的には、モニタリング等の定期的な検査の必要性が指摘されている。また、経済的な不安から、家計負担の増加に対して何らかの手当の必要性が指摘されている。

ウ 租税

前記のとおり、アンケート対象者の多くは放射能による追加的な負担による経済的な不安を抱いている。また、不動産の価値や住環境が下落・悪化したことから、2011 年は減免措置をとったこともある固定資産税や住民税の負担の合理性に疑いが向けられている。これも経済的な不安の一種といえる。

エ 対応全般

行政や東電の対応は全般的にきわめて低く評価されており、被害者にストレス・不安・不信感が生じている。また、原発の是非に関する意見は、原発事故後の行政や東電の対応状況を踏まえたものであり、行政や東電の対応に関係する。加えて、原発を廃炉にしなければならないと考える人もいる。

(8) 健康

原発事故との因果関係については不明確な部分もあるが、子どもについては様々な症状が指摘されている。親については不安、ストレスと、それに起因するとみられる愁訴や体調不良が指摘されている。

これまでの自由回答の分類項目を整理すると、下記のようなになる。

【分類細目表】

1 生活拠点
(1)避難関係
ア 避難継続中
イ 避難したが戻ってきた
ウ 避難したいができない
エ 避難しない
(2)保養関係
ア 保養プログラムの拡充を望む
イ 保養に関する情報を得たい
ウ 保養に満足した
(3)除染関係
ア 除染にある程度満足している
イ 実施された除染に不満がある
ウ 除染を望む
エ (実施の有無にかかわらず) 除染の効果に疑問がある
2 食生活
(1)食
ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない
イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている
ウ 学校(保育園)給食に対する不満
(2)洗濯
3 家計
(1)収入
(2)支出
ア 避難・二重生活の費用
イ 放射能対策費用

ウ 外遊びの代わり
エ 他県産の食材・水の購入費用
オ 租税、公共料金
カ 保険
キ 住宅費用
4 子育て
(1)遊び
ア 外遊びをさせている
イ 外遊びを制限している
ウ 室内遊び場
(2)放射能対応
ア 子どもの検査
イ 積算計（ガラスバッジ）
(3)出産
ア 妊娠
イ 流産
(4)その他
5 人間関係
(1)夫婦・親族
(2)近所・知人
(3)外部
(4)避難・賠償の取り扱いに差異のある人
6 情報
(1)情報の収集
ア 情報不信
イ 関心の低下
(2)情報の発信
7 賠償・補償
(1)賠償
ア 賠償の打ち切りに対する不満、子どもの将来の損害に対する賠償

イ 賠償の対象、範囲の線引きに対する不満
(2)社会保障
ア 子どもの健康
イ 家計負担
(3)租税
(4)対応全般
ア 行政の対応に対する不満
イ 東電の原発事故対応に対する不満
ウ 原発事故を踏まえた原発の是非
エ 寄付金の使途に対する疑問
8 健康
(1)子ども
(2)親

上記の分類項目にしたがって、以下、2013 年 1 月～5 月に実施した調査の自由回答欄の具体的な記述をみていくことにする。一つ留意していただきたいのは、下記の自由回答は「2013 年の上半期の時点での意見」であり、2014 年 9 月現在は、こうした意見や状況が変化している可能性があるという点である。

なお、上記の分類細目表にしたがって自由回答欄の意見を取り上げるにあたっての掲載方針を示しておきたい。第 1 に、基本的には、分類細目に該当する意見を網羅的に掲載するようにした。ただし、個人が特定される可能性が高い情報は掲載を見送った。具体的には市町村名、大字名の単位では個人が特定しにくいので掲載するが、それより小さい単位は掲載を見送った。その場合は、同じ趣旨の意見で、個人が特定しにくい自由記述を掲載した。第 2 に、自由回答に書き込まれた意見は、1 人を除き、すべてが「手書き」である。したがって、誤字・脱字が多い。誤字・脱字はなるべく「そのまま掲載」することにした。

3 生活拠点

3.1 避難関係

生活拠点のうち、避難に関する意見は、①「避難継続中」、②「避難したが戻ってきた」、③「避難したいができない」、④「避難しない」の4つに分けられる。この意見のうち、最も多いのは「避難したいができない」、その次が「避難継続中」、「避難したが戻ってきた」の順である。

ア 避難継続中

避難を継続している人の中には家族と離ればなれになることの不安や家計負担の増加を訴えている。

- ・「原発事故があって以来、避難したくても子どもたちの学校や夫の仕事(ガソリンスタンド)の都合で引っ越すこともできずにいましたが、週末や夏休み、冬休みだけでも避難したいと思い、山形県米沢市に避難できる部屋を借りることができて安心したもの、家賃は負担せずにすんでも、電気・ガス・水道など福島←→米沢の往復でガソリン代もかさみ、生活は日をおごとに苦しくなるばかりです。」
- ・「原発後から、家族とはなればなれで、母子世帯です。たまに地元に戻省したりしましたが、私自身、精神的にまいっています。子供のため・・・と思い避難していましたが、子供の心の方が最近不安定になってきており、いままでガマンしていた事、本当はとてもさみしく家族と一緒に暮ら事をのぞんでいるようです。」
- ・「自主避難しているという状況もなかなか理解されづらい。いずれ戻ってきて生活するにも不安。避難し続けるのも経済的にも、家族が別れて暮らしている状況が精神的にも大変。でも子どもの健康のためにはできる限りしたいと考えている。しかしいつまで続けられるか・・・。」
- ・「震災時、第2子妊娠中で、出産後はずっと線量の低い実家に子供た

ちと避難しています。夫は仕事帰りや週末会に通っています。子供たちが父親と離れて暮らす影響が心配ですが、自宅周辺が（山林）とても線量が高くて戻るのをためらっています。」

- ・「現在山形市に母子避難しています。山形の借り上げ住宅に2011年8月から住み始め、当初は週末ごとに私たち（母子）が福島に戻り父とともに過ごす時間を作るようにしていました。住民票は福島市のままなので、医療費や予防接種などの手続きが少し面倒です。幼稚園も本当なら今年少の歳なので入園させたかったのですがいつ福島に戻るか先も見えず、避難による経済的困窮のため保育料の念出が難しく今年度は断念しました。次年度ももう少し山形でがんばってみようと思います」
- ・「県外に避難しています。やはり福島で子育てをするのはまだ不安を感じます。家計は苦しくなりますが後から後悔したくないと思い避難を決めました。この子が1年生になるまでは県外にいる予定です。その後は様子をみて決めようと思います。」
- ・「現在、自主避難をしています。以前は子供を転校させ避難先に住んでいましたが、進学のためもあり、現在は、自宅と避難先を往復する日々です。」
- ・「3月15日に東京に避難しました。月半分半分で行き来しています。・・・月半分は東京で私と二人きり、福島での月半分も最初の数ヶ月は外にも出せず・・・」
- ・「2012.4月から実家のある茨城へ移動（母子避難）しました。それからというものの月3回、週末に子どもたちを預け郡山へ仕事に通う暮らし。間もなく1年になります」
- ・「原発事故後、宮城県へ自主的に避難しました。二本松は、放射能が高いにもかかわらず、避難区域に入らずとても不安です。・・・子供を第一に考え、引越しましたが、職がなく、家計が大変です。」
- ・「秋田に転勤が決まった時に、初めて県外に家族で引っ越す不安と共

にほっとした気持ちがありました。秋田に来て、1番うれしかった事は水道水を安心して使える。子供を普通に外を歩かせる事ができたことでした。秋田は0.03、福島は0.15、室内の線量の違いに安心しました。」

イ 避難したが戻ってきた

避難したが福島に戻ってきたとの意見がある。その原因としては、家族と離ればなれになることの不安や家計負担の増加等がある。

- ・「原発事故後、1ヶ月程度は子供達を長野県の親戚の元へ避難させ、私自身も職場の理解が得られた為、2週間程度休み、一緒に避難しました。私の母にも同行してもらい、長野にて子供達と共に過ごしてもらいました。・・・学校が再開してからはやむを得ず郡山に戻りました。」
- ・「毎日色んなことに気をつけて生活しては疲れて。子供たちがまだ小さいので、色々考えて母子避難もしました。経済的にも苦しくて、家族離ればなれというのも、とてもつらくて1年しかできませんでした。」
- ・「自主避難をしていたが、母子で生活していくにはお金もかかるし、子供を保育園にあげ、自分が働くことさえできなかった。他の県の人の中には、子供や私達福島から避難してきたのを良く思わない人もいた。だから福島にもどってきた」
- ・「避難しても家計の事情で線量のある福島に戻らざる得ない事本当に子供に申し訳なく、いつも将来が不安になります。どうしたらいいのかわかりません。」
- ・「本当ならまだまだ避難して線量の低い所で過ごしたいが、経済的にも精神的にも限界。同じような状況で仕方なく避難先から戻ってきている人々がたくさんいる」
- ・「原発事故後、子供達としばらく山形へ避難していました。家族はな

ればなれになり、1人で3人の子供の生活の責任を持ち、4人目の妊娠、子供達も辛かったと思います。自分も周囲に頼る人がないため不安な毎日でした。春に福島に戻り出産し、生活しています。」

- ・「8才、5才、4才の子供がいて将来先がみえない健康の不安もあり後悔したくない気持ちで私も夫を残し、1人の友達を頼りに遠く県外へ子供3人をつれて避難をしました。・・・福島に戻って家族が1つになり心から安心しました。」
- ・「水素爆発の前日の夜、恐怖に怯えながら、近隣の方々への後ろめたさを抱きながら山形の親せきの家へ子供たちを連れて避難した日から私たちの闘いは始まった様に思えます。山形への避難は2週間ほどで自宅に戻りました。・・・その後、実家（仙台）への避難を希望しましたが、親戚から『放射能を持って来られては困る』と言われ、・・・11年秋に、実家の理解と助けもあり、仙台に（実家に）避難しました。小4、小1の息子たちを転校させ、3年間の避難の予定でした。しかし、長男が学校でひどいじめにあい、・・・心身症になってしまいました。本人は何とかそのまま耐えようとしたましたが、病気を期に福島に戻ることにして、今現在は市内に生活しています。」
- ・「郡山市は避難の対象ではありませんでしたが、私と夫は郡山に残り、子供は保育園をやめ、祖母と一緒に南会津へ自主避難させました。自主避難のため、もちろん自分達でアパートをさがし、毎月家賃を払い、生活に必要な家電製品を買いそろえました。しかし経済的にもムリがあり、5カ月程で自主避難をおえました。」
- ・「子供の為と思い、母子で避難したものの、週に1回のペースで会いに来てくれる主人と子供が『離れたくない』と帰ることを拒む姿を見ると、放射能からのがれるためとはいえ、避難生活が本当に正しかったのか、迷いを生じます。更に、避難区域に該当しなかったため、補償も得られず、二重の生活は、本当にきつかったです。避難生活を終え、家族揃って過ごせるようになり、1年が経過しようとしています」

ウ 避難したいができない

避難したいが、できないという意見がある。その原因は、家族と離れればなれになることの不安、家計負担の増加、仕事、家（のローンなど）、環境を変えることの不安、親族への後ろめたさなどである。

- ・「家を建て、避難をしたくても、できない状況です。」
- ・「できればこんなところに住み続けたくないが、住宅ローンもあるし、主人の仕事が辞められないので仕方なく毎日をやり過ごしている。子供の事を考えると家族は同じ場所で暮らすのが一番だと思うので。」
- ・「避難したくても出来なかったことを悔やしく思う気持ちもあれば、いざ避難した所で、旦那と離れる事の不安、お金の不安もたくさんあり、食欲もなくなるほど考えてしまいずっと福島にいました。」
- ・「福島などは、都会とは違い、ほとんどの人は地元根付き、なかなか避難するなど、気持ちの面で難しいし、本当にお金のない人達は簡単には避難など出来ません。」
- ・「母子家庭なので、他県に避難をして、知らない土地で全く知らない人の中、仕事もあるかどうかともわからないままでは、避難はできなかった。」
- ・「避難したくても、戻ってから主人の両親との関係がぎくしゃくするのではないかと、娘が新しい生活、友達になじめないのでは・・・と思ひ、あきらめるしかなかったのが、本音です。」
- ・「避難者の生活は今も大変だとは思いますが、避難者は避難したくてもできない地域の人との賠償額等の差に不満を感じます。」
- ・「子供が体に影響があったら、なんで福島に居たのか、なんで一番大事な物を守ることが出来なかったのか、悔やみきれない。・・・事情で避難出来ない人の為にも、国・県・市がもっと親見になって考えてほしい。」
- ・「避難できるのも家計にゆとりのある人達のように思います。こどもの心と体に影響があるのでは？と心配しても、いろいろな理由があ

り、行動（避難するという）に移せない自分を悪く思うことも多いです。」

- ・「あの時避難したくてもできませんでした。今とても後悔しています。今でも避難した方がいいのではないかと考えています。もうしたくてもできませんが・・・子供を実験台にされている様な気持ちになってしまいます。」
- ・「ここで避難も出来ず事故前と同じ生活をしている・・・せざるを得ない者もいるという事を知っていただきたい。出来る事なら子供達だけでも外で安心しておもいっきり遊べる所へ避難させたいです。でもそれでは家族がバラバラになってしまいます。」
- ・「避難したくても、経済的な不安が多すぎる。家族がバラバラになる事への不安、家を空けっ放しにする事への不安、色んな葛藤の末、福島に住む事を決めた」
- ・「避難したくても、仕事があり、避難できません。希望すれば、だれもが避難できるわくぐみ作りをしてほしい。」
- ・「避難したくてもお金ない。小さい子を抱えて、不安でいっぱいなのに、避難するお金がない。生活ができない。たすけて 避難したくてもできない」
- ・「避難出来ない人こそ、もっと助けられるべきではないのか？」
- ・「私も夫も仕事を持っている為、避難したくても出来る状態ではなかった。」
- ・「簡単に避難したりすることができないからこの町に住んでいるのです。仕事、子育て、生活、全てを考えるとスグに行動できないのです。『仕方ないから』という部分もあります。」
- ・「避難はしたいが、両親はいるし、自分の故郷が荒れていくのは耐えられない。」
- ・「避難しろ、と言う方もいらっしゃいますが、全く知らない土地で新しい生活をするのは、人付き合い、仕事、子どもの環境（心の面）で

の心配も多く、たくさんのストレスがかかると思うと、なかなかできないという現実です。」

エ 避難しない

避難しないという決意を表す意見があった。

- ・「なるようになる！地震の後、平成24年7月に新築。ずっ～と郡山に住みます。主人の仕事も、自分（母）の実家も友人もいるので。今の生活をすててまで避難することはない。病気になったらなった。普通の人だって病気になることはある！！食べ物だって、本当の所、わからない。毎日を楽しく、無事故で暮らせればそれでよし！人間みな明日はわからない。」
- ・「子も愛しているし、故郷も大好き この単純なことを、心の底から感じる事ができたのは今回の震災がきっかけです。普通や平ほんな毎日に、素晴らしい価値があったと本気でそう思います。でも絶望はしていません。福島に残って、周りに何と言われようと、がんばっている人たちを知っているので、皆と一緒に少しずつ、少しずつ前に進んでいこうと思います。だから避難はしない。福島は負けない。この想いも負けない。」
- ・「県外に実家がある家庭は避難しました。『うちは？にげないの？』と子供。『どうする？横浜のおばさん家、行く？』と私。『いや！家族がバラバラなんて、絶対にいや！』と子供。この言葉で、私たちは、避難しない事にしました。この選択が正しいかどうかは分かりません。」

オ 特徴

避難を継続している人の大半は、家族と離ればなれになることの不安、家計負担の増加などを訴えている。その不利益に耐えられずに福島に戻ってきたケースもある。避難したくてもすることができないでいる人と併せると、相当数の人が今なお福島で生活していることになる。それに対し

て、避難しないという決意を明確に示した人はきわめて少ない。多くの人が、「避難しない」＝「放射能をめぐる様々な不安」、「避難する」＝「家族と離ればなれになる、家計負担の増加」というジレンマを抱えている。

3.2 保養関係

保養に関する意見は、①「保養プログラムの拡充を望む」、②「保養に関する情報を得たい」、③「保養に満足した」の3つに分けられる。

ア 保養プログラムの拡充を望む

比較的安価に保養することのできるプログラムの要望に関する意見があった。例えば、プログラム数の増加、対象者の拡大、保養内容、契約リスク、不公平感等である。

- ・「保養サービスをもっと増やしてほしい。抽選などで行けないのはかない。県外に出ることで、少しでも安心できる自分がいる。」
- ・「未就学児を対象にした支援（主に保養）を増やしてほしいです。」
- ・「長期休みの時だけでも、何も気にせずに行く事ができる保養プランがあれば、少しでも楽しく、すごせればうれしいです。」
- ・「高速道路無料化やふくしまっこプロジェクトなども昨年3月に終了してしまったので、子どものためにもっと続けていって欲しいです。」
- ・「子供達、自分の為にもリフレッシュ（保養）したいと思うが、ガソリン代等の出費がかさむので家計に大きな負担がかかる。」
- ・「保養のプロジェクトも多々ありますが、人数の制限（子ども5名以上etc）があり、家族だけでは、使えなかったりします。もう少し個々が利用できるものがあれば、親の負担も軽減できるのではないかと思います。」
- ・「定期的に保養に出したいと考えてはいますが、受け入れ団体もだんだん少なくなり費用も私達にとっては高額になってきました。」

- ・「これ以上、浴びさせないように、親の努めとしてがんばっている事は“保養”です。お金がかかります。大変です。どうか線量の低い県で福島県の子供たちを救って下さるよう、サポートして頂けるとありがたいです。」
- ・「福島県内にての集まりよりも他県放射能の低い地域にての集まりを希望します。又その費用等援助して頂くと行きやすいです。保養もかねての語り合いの場を希望します。」
- ・「毎日毎日、放射能を意識しない日はありません。子供たちの健康への不安も同じです。もっともっと、国をあげての除染と、子供たちの保養を行ってほしいです。」
- ・「ベラルーシの方では、子供達に静養も兼ねて1ヵ月程の移動教育的なプログラムがあると聞いています。体内除染するのだそうです。そんな仕組みが福島の子供達にもできてほしいです。」
- ・「学校・学級単位での短～長期保養、就職前の子供のいる世帯への家族単位での保養プログラムを実施してください。また、避難者しか高速道路無料化の対象にしていますが、現在県内に居住（住民登録）している子供がいる世帯も無料化し、週末等県外保養がしやすいようにして下さい。」
- ・「保養プロジェクト・・・働いている人は、子供と一緒に参加・・・と言っても休みが取れずに断念する事も多いです。主婦は時間もあるから行けるけど・・・と不公平を感じずにはいられません。」
- ・「リフレッシュキャンプなど申し込みましたが、いつも落選です。子供の保養をさせてあげたくても出来ません。」

イ 保養に関する情報を得たい

保養に関する情報にアクセスできないという意見があった。

- ・「夏休みだけでも母子でひなんしたい！！そんなプロジェクトを探しても探し方を知りません。」

- ・「少しずつですが、心も落ちついてきました。夏休みなどは、保養などもできたらと考えています。何か情報などがあれば、教えていただけたらうれしく思います。」

ウ 保養に満足した

保養を体験して、保養についての必要性を訴える意見があった。

- ・「福島っ子を使って夏休みや冬休みは保養に行っています。そういう所しかたよる所がないので続けてほしいです。」

エ 特徴

保養に関する意見は多い。その背景には、子どもの外遊びの制限がある。つまり、外遊びの代替手段として保養を位置づける家庭が多い。保養には交通費や宿泊費などの費用が必要となるが、各家庭の経済力には限界がある。そこで、保養プログラムに大きな需要がある。これに対し、供給されている保養プログラムは十分でなく、むしろ減少傾向にある。その結果、保養プログラムの拡充を求める意見が多く寄せられているものと考えられる。

なお、保養に関する情報については、インターネット上に保養情報を整理したサイトが存在していた可能性がある。しかし、インターネット環境がないなど、何らかの理由により情報にアクセスすることができない家庭が存在する。紙媒体はコストの問題や情報がリアルタイムではないという問題があるが、情報伝達方法を工夫する必要がある。

3.3 除染関係

除染に関する意見は、①「除染にある程度満足している」、②「実施された除染に不満がある」、③「除染を望む」、④「(実施の有無にかかわらず) 除染の効果に疑問がある」の4つに分けられる。

ア 除染にある程度満足している

除染によってある程度安心感を得たという意見があった。

- ・「私たちの住む大玉村は、村長・教育委員会が、はやくから除染を行い、外あそびをできる状態にしてくれています。」
- ・「除せんもだんだんすすんでいっているの、公園にもいけるようになりました。しかし、まだ庭の土とかもどうしたらいいかわからず、そのままだし、考えないようにするだけで、不安は不安です。」

イ 実施された除染に不満がある

除染に対する不満についての意見があった。例えば、除染方法のずさんさ、除染後の処理方法、除染後の放射線の数値等である。

- ・「除染の適当さになかり、国や県の信用が無くなりました。(雨どいのみでした)。屋根や壁、庭などの表土もせず、さっさと終わらせられ、頭にきます。」
- ・「市で行った除染が適当にやったとニュースでみました。うちの場合も除染前と後でまったく数値が変わらずむしろ子供部屋は高かったです。業者の方に聞いても『みんなそんなもんですよ』と軽く流されたかんじでした。やるならきちんと責任をもってしっかりやって欲しい！！適当にやってのちのち問題などおこすなら最初からやらないでほしいです。」
- ・「道路の除染をやっていたが、本当にほどの端の少しの土をとっただけで、何が除染が全く分からない。」
- ・「大波地区は、福島市の中でも放射線が高く、早くに除染して頂きました。しかし、仮置場までは1km程度しか離れていません。小さな子供にとって、この場所はどうかだろう・・・と今も考えます。」
- ・「すぐそばに終末処理場があり、汚泥を保管するための装置やプールが作られており、防護服を着た職員が歩いています。」
- ・「除染されたら数値は下がるだろうから、除染されたら福島へ戻つ

もりでしたが、結局除染されたが数値は下がらずで、まだ福島へ帰れずにいます。」

- ・「除染の優先順位が分からない・・・公園などがなぜ後まわし?! 本来に意味が分からない。」

ウ 除染を望む

除染を早くしてほしいという意見があった。家庭のほか、学校・幼稚園、通学路等、生活圏内すべての除染を望む意見が多い。

- ・「除染は学校や幼稚園など公共施設ばかりで、自宅の庭、通学路は全く進んでいません。」
- ・「学校に通っていれば学校はすぐ除染してもらえました。しかし未就学児は家にいる時間が長いのに家まではある程度の（シーベルト）がないと除染してもらえないという不公平があります。」
- ・「自分の家を除染しても、隣近所や近くの川の除染が進んでいないので、敷地を一步外に出ると線量が高くなる。」
- ・「なかなか除染が進まず、小さい子を育てる親としては不安があります。ホットスポットもまだまだ沢山あり、外で遊んでいても本当に大丈夫なのかという不安は多々あります。」
- ・「先日は子供が外で転んでしまい、顔から地面につっこみました。そこには除染されていない真っ黒なドロのかたまりがあって、顔中がドロだらけになり、目からも鼻からも口からもドロが入ってしまいました。直接体内にセシウムを入れてしまったことで、とても落ち込みました。園や学校は除染してありますが、普通の家や道路は除染されていないので、ちょっと転んだだけで被ばくすることになりつらいです。なぜ転ばせてしまったのだろう、と自分を責めてしまいます。普通の散歩はできません。」
- ・「除染もっと早くやって欲しいです。私達が住んでいる所は、市の除染の順番では早くても3年後と言われました。個人で除染出来る範

囲もたかがしれています。そんな環境でどうして子供を外で遊ばせられるのでしょうか？」

- ・「我が家は、低線量地区であり、除染は、親たちが、草むしりをしていくくらいです。もともと0、3マイクロシーベルトくらいで今も0、3です。低線量地域の除染もすばやくしてほしいです。」
- ・「早く除染をすすめて欲しいです。地域の清掃なども側溝そうじも制限されており（できない）、きれいとはいえない。地域の清掃もそれぞれの違いがあり、やる人は積極的だが、放射線量が高そうな所には、人によってはまったくやる気がなく、低い所ばかりそうじしている。業者の方とかに徹底的にやっていただきたいです。」
- ・「子供に外遊びも自由にさせられず、せっかくつくった庭でも遊ばず、とてもストレスのたまる生活を送っている。せめて、庭の芝の除染など、住み続ける上での最低限の安心のために1日でも早い対応を望むばかりです。」
- ・「除染しても時間が経つと少しずつ線量があがるので、定期的に（特に小さな子供が遊ぶ場所は）除染してもらいたいです。」
- ・「除染も、民間ばかりではなく、自衛隊など大きい規模で早くに終わらせるべきだと思います。」
- ・「草や木は土地の所有者の所有物となるためか、空き地など自宅付近の除染作業（草刈りなど）ができず、今だに線量が高くて、外で遊ばせられません。せめて自宅前の水たまりの数値が下がるように何か対策をして欲しい！！水たまりができると、ずーっと1 μ Sv/h以上で、泥遊びをさせたいのに、できません。水たまりなんて子どもが大好きな場所なのに・・・。という怒りが収まっていません。」
- ・「お金なんていないから、除染してほしい。除染ありき。除染さえすれば子供も外で遊べるし、親もストレスをかかえる量が減るはず。」
- ・「私の住んでいる福島市大森地区は、場所によって、放射線量のひらきがあります。3才児の小さい子とものいる家庭では、個人で測定し

た線量が高い場合は、市できちんと測りに来て、それで高い場合は、除染の対象にしてほしいです。さほど高くない場所が、大まかに高い地区として、判断され、作業が進められているのが現況です。」

- ・「行政の対応を信じ、現在自宅除染を待っている状態です。しかし、仮置き場も決まらず、小さな子を持つ親としては、早く何とかして！という思いです。町内会でも、もめにもめてこの状態です。周りの住民ともうまく暮らしていけるよう、こういった地域をどうにかして下さい。という思いです。となりの町内会はすでに除染もおわり、心はあせるばかりです。富成幼稚園、富成小、ともに来年度は入園児、入学児ゼロという、悲しくじつにさみしく感じてみんな暮らしています。本当に人口は減る一方です。」
- ・「長女の小学校入学を機に福島に戻ることを決めましたが、森合小入学説明会時に敷地内の12 μ Sv/hを超える場所がある。予算がなく除染できていない。という話を聞いて大変不安です。公立小学校内でそんなエリアが残っているなんて異常です。予算がないで済まされてほしくないです。」

エ（実施の有無にかかわらず）除染の効果に疑問がある

除染の効果を疑問視する意見もあった。

- ・「周囲が山林の地域で除染して、効果があるのでしょうか？その場しのぎの除染では意味がありません。多額の費用がかかっているのですから、もう少し、現実的な取り組みをしなければ、いつまでたっても除染のくり返しではないかと思います。」
- ・「除染してももう線量はさほど下がらないと思います。その中でより安全に生き抜く方法を考えていきたいと思っています。そんな視点を自治体はもってほしい。」
- ・「除染作業といっても、表面はたしかに線量は低くなっても結局はとなり近所に流れていっているだけで何も変わらないと思う。」

- ・「最近になって、市で除染（住宅地）と言っていますが、除染をしても震災前の安全で安心して暮らせる地にはもうなれないと思ってしまっています。」
- ・「除染なんて、かたちだけで、ほんとに、だいじょうぶなのか…」

オ 特徴

福島に居住している住民の多くは、迅速かつ適切な除染を求めている。除染は、避難という選択肢を除けば、生活圏内の放射能を取り除く唯一の方法だからである。しかし、除染は進んでいない（イ）。実施された除染にも不満が指摘されている（ウ）。また、そもそも除染の効果が疑問視されている（エ）。除染に満足している意見は少ない（ア）。したがって、除染は住民の不安を軽減する有効な解決方法となっていない場合が多い。

4（食）生活

4.1 食

食に関する意見は、①「地元産の食材や水道水はできるだけ使わない」、②「地元産の食材や水道水を使わざるを得ない、使っている」、③「学校（保育園）給食に対する不満」の3つに分けられる。

ア 地元産の食材や水道水はできるだけ使わない

他県産の食材やミネラルウォーター等を高くても購入しているという意見があった。その理由としては放射能・子どもの健康が指摘されている。また、その結果、家計負担が増加したことが指摘されている。

- ・「食生活では、安全とは言われても、あれば、高い値段でも、他県の商品を買い求め、水（飲料水）は、いつも買い求めている。うちのよ
うな、母子家庭で、収入の少ない家庭では、大きな問題です。でも、
子どもの健康を考えると、買わざるをえないし、やはり、将来がとて

も心配。もし、病気になったときに、こうかいしたくない……。あの時、ちゃんとしていればと……。」

- ・「食べ物はなるべく福島県より遠い県外産などを買うことが多いのでお金がかかる。原発前は福島の野菜やくだものは日本一だと思っていた。」
- ・「我が家は水を購入して飲んでいます。水道水は大丈夫との事ですが、ちょっと本当なのか？と不安に感じます。食べ物も大丈夫との事ですが、県外産を選んでます。義父がつくってくれていた野菜も申し訳ないのですが、お断りしています。義父の事を考えるとすごく申し訳なく思い、すごく複雑な気分になります。」
- ・「地元の野菜も検査しているから大丈夫と言われるが、ホントに！？基準値が低いのでは？実家の芝生はとても数値が高いです。農家の土も高いはずでは！？入れ替えはしているのですか？？米も同じ……。地元のものを食べたくても食べられない。」
- ・「水や米、野菜は全て県外のものを使う。家計が以前より負担が増えた。母親のストレスが増えた分、きっと子供たちに何らかの精神的負担をかけているはず。」
- ・「野菜やお米も福島産の美味しい商品があっても不安でわざわざ県外産のものを購入して料理しております。」
- ・「震災前は、祖母が作った野菜や米をもらって食べていましたが、原発事故後は、祖母にも、『いらないから。』と言って、もらっていないので、祖母にも悪いなと思うし、一番は、県外の高めの野菜や米を買っているんで、家計的にも悪い。祖母は84才で、野菜作りを楽しみとしていたので、今、その趣味を奪われて、かわいそう。ボケてしまうんじゃないかと心配だ。」
- ・「事故前までは野菜等全て実家で作ったものを食べていたが、後には生協等で全て購入している。主人の実家で子供にトマトやキュウ리를畑から取って食べさせているのがとても気になるが、大人は大丈夫で

も子供にはと思うのだが、なかなかいい出せなくて困っている。また、飲料水も購入したり、高圧機で家の周りを何度も洗い流したりして今まで以上に出費がある。」

- ・「原発事故があってから、なるべく県外の方へ子供達を遊びに連れて行ったり、県外産の物を取寄せたりして食べさせる。水道水は、一切使っていない。といったことをしています。いつになったら普通の生活になるのでしょうか？」
- ・「事故からもすぐ2年がたちますが、未だに原発事故に伴う出費（放射能除去に良いとされる食品や、県外産の米・野菜の調達、子供のために車で往復2時間かけて公園など移動をし、ガソリン代、一字疎開による二重生活など）で、いくら賠償金（家族全体で80万ほど）を受けとっても、震災前の貯金まで戻らないし、未だに赤字の生活。」

イ 地元産の食材や水道水を使わざるを得ない／使っている

地元産の食材や水道水を使っているという意見の中には、健康に対する不安を指摘するものや、食材の流通事情や家計の事情で仕方なく地元産の食材や水道水を使っているというものがあつた。

- ・「チェルノブイリの事件から、今になって色々出てきてる問題をTVで観ていると、地元で取った物を食べていた人に多く出てると思い、出来るだけ他県、北の方か東京より遠い方から買入したいとおりますが、だいたいが近くの県しか売ってなくそれも不安です。」
- ・「農家でもあり、食に関しては、とても悩み、私はノイローゼ気です。”大丈夫”と言われる数値であっても、心から信用できない自分がおり、不安でしかたがありません。周りは、自分と同じようには感じておらず、自分だけが不安で、無駄な心配をしているとバカにされる気分にもなり、頭がおかしくなりそうで、不安をのみこんで考えないようにもしています。」
- ・「自分の家の畑で採れた野菜や米を放射能測定器で測って基準値に満

たないので食べています。除染は今のところまだです。全ての野菜を測ったわけではありません。葉物野菜等は沢山作っていない物もあり、1キロを刻んで測るには量が満たない物もある為です。全て買って食べられる程、経済的に余裕もないし、仕方ないと思っています。小さい子供も同じ物を食べさせています。大きくなってから健康に影響が出ないか心配はあります。」

- ・「福島では、スーパーなどに売っている、福島産はすべて検査して出荷されているので安全だと、かえって隣県の野菜のほうが高い数値がでているかも・・・という話を聞きます。私は検査をきちんとしている野菜を選んでいますが、やはり、不安です。」
- ・「自分の住む（家・庭）土地、住んでいる周りの環境は復興とうたわれていても もう二度ともとはもどらないとわかってはいても考えることはある。土はよごされ 除染したからといって全てがもどるわけではない。庭でできたものも線量をはかり、食べていくのだろうかとか。」

ウ 学校（保育園）給食に対する不満

学校給食に対する不満を述べる意見があった。その理由としては、地元産の食材や水道水の使用が指摘されている。

- ・「学校給食にも福島県産米を使用することとなり、家で一生懸命県外産の野菜や肉、水もミネラルウォーターで内部被爆を防ごうとしてきたのに、どう頑張っても福島県に居る限り、子供たちの被爆は止めようもないのです。」
- ・「食に関して大変心配しています。（特に学校給食）この地に置いて、地産地消の考えは無くしてもらいたいと思っています。」
- ・「給食に、このへんのものを使うことは絶対やめてほしいです。除染もしてない土地で作った食べ物をいくら検査しても、安心して口にはできないです。子供が食べるんだから、より安全にしてほしいです。」

- ・「本当に健康面でだいじょうぶなのか たべものも安全なのか せめて、給食などは県外産を使用し内部被ばくはさげたい。ここで住んでいるのだから・・・ これ以上こどもに害になるものはたとえ数値が低くても0（ゼロ）のものだけたべさせたい。」
- ・「いくら基準値以下だとか、不検出だったと結果が出て、県産の野菜や米を学校給食に出すのはおかしいと思います。放射能に大丈夫という値はあるのでしょうか。ただでさえ、常にどこにいても放射能を浴びているというのに。ここにいる限り、何十年も浴び続けなくてはならないのに。家では遠く離れた県外産の物を選んで食べています。」

エ 特徴

食事による内部被ばくの不安から、可能な限り地元産の食材や水道水を避けようとしている。その結果家計負担が増加している。他県産の食材の安全性をも疑問視する意見もある。また、同じ不安から、学校給食で地元産の食材や水道水が用いられることに対する反発もある。食に関する意見の大半はこれらの意見であり、数としても多い。何らかの事情で地元産の食材や水道水を使わざるを得ない家庭を含め、食による内部被ばくの不安は相当に強く、多い。

その一因には情報不信がある。例えば、「“大丈夫”と言われる数値であっても、心から信用できない自分があり、不安でしかたがありません。」と指摘されている。したがって、食事による内部被ばくの不安には、①放射能の存在、②情報不信という2つの原因があることになる。食事による内部被ばくの不安を解消するためには、食材や水道水の安全性を確保するだけでなく、その情報を透明性のある方法で流通させる必要がある。これによって不安が解消され、家計負担の圧迫をも解消することができるが、難問であり、未だ解決には至っていない。

4.2 洗濯

洗濯物は外干ししていないという意見があった。その理由としては、放射能被ばくへの恐れが指摘されている。

- ・「家の前にあるゲートボール場がホットスポットで、洗たく物を外に干せません。布団ももちろん干せません。前の様に晴れている日には外に干せるようにしてもらいたいです。」
- ・「原発事故後、……毎日窓も開けず、掃除は水ぶき、洗濯は部屋干し、お布団はコインランドリーに持って行き、乾燥機にかけ……てみると、毎日毎日ビリビリした生活をしてきました。今は、ここまでではありませんが、それでもまだまだ不安・心パイになります。神経質って言われた事もありました。正直、心も体もつかれました。」
- ・「毎日思っている事は、出来れば洗濯や布団を外吊るし出来て、何も気にせず玄関や窓を開放出来て、休日は近所の公園で子供と一緒に遊べる（砂遊び等）元の生活スタイルに戻りたい。あの日（3月11日）以前に戻って、生活したい、生活させて欲しいです。」

特徴としては、外干しによって放射能が家屋内に侵入することを不安視していることが挙げられる。放射能を取り除くことが困難な状況を前提とすると、室内干しやコインランドリーの利用によって対処するしかない。室内干しは、雑菌（臭い）や乾きにくい等の問題があり、日常的にストレスを感じさせる。また、エアコン代の高騰を指摘する意見もあり、家計負担が増加している家庭もある。

5 家計

5.1 収入

収入に関しては、失業等により減少したという意見があった。原発事故

の影響を指摘するものと、不明のものがある。

- ・「原発事故により夫の仕事がなくなり、一時期失業中でした。子供は家にパパがいつもいるのを喜んでいましたが、今まで必要のなかった出費があったりしてお金の心配でイライラ（私が）して、子供にもあったりしていました。」
 - ・「原発後、様々な問題があり、家計も苦しく、失業している状態で、子育てにも影響があるのでなんとかしてほしい。」
 - ・「震災後、本当に就職先なく困っています。理由は子供3人が保育所に行っていて病気でいつ休まれるか分からないと言う理由です。現在、何とか実家に頼み事務の手伝いをしていますが、それでは収入につながりません。これから先、子供が成長するのに先も見えずと言う感じです。」
 - ・「この2年間、原発後、どこへも行けず、小さい子供をかかえ、不安がある中、私は、仕事も、続けることができましたが、主人は仕事を失い（1年前に）、家（借家）もガタガタになり、生活に不安をかかえてきました。」
- その他、田畑が使用不能となり、食材の自給ができなくなったという意見があった。
- ・「事故前までは野菜等全て実家で作ったものを食べていたが、後には生協等で全て購入している。」

5.2 支出

支出に関しては、①「避難・二重生活の費用」、②「放射能対策費用」、③「外遊びの代わり」、④「他県産の食材・水の購入費用」、⑤「租税、公共料金」、⑥「保険」の6つに分けられる。

ア 避難・二重生活の費用

避難した家庭は、避難先の住宅費用や家財の購入費用のほか、母子避難の場合は二重生活のため生活費全般が増加するといった意見があった。

これについては、前記「避難している」、「避難したが戻ってきた」に挙げた意見のほか、次のような意見があった。

・「とにかく二重生活お金がかかる！ 交通費もばかになりません…。」

イ 放射能対策費用

放射能対策費用としては、除染費用、線量計等の機器の購入費用、学校の送迎によるガソリン代等がある。

- ・「家が山沿いなので、山を除染しないと安心して生活できない。住んでいる地区は住宅の除染がまだまわってこないため、実費で業者をたのんで除染した。」
- ・「放射線に対する物の購入（洗浄キ、線量計など）……に対する補償がきちんとされていない」
- ・「家を何度も洗浄し、畑や庭の土を取っても、その費用はどこからも出ません。学校の送迎でガソリン代もかさみます。」
- ・「事故後、うちは自営で建築業ということもあり、家を高圧洗浄で洗い、家の前の庭は土を入れかえてコンクリートをうちました。」

ウ 外遊びの代わり

外遊びを制限する代わりに、保養や習い事をしたり、有料の室内遊び場を利用したりすることがある。

これについては、前記1(2)「保養プログラムの拡充を望む」に挙げた意見のほか、次のような意見があった。

- ・「週末は、子供達を外で元気に遊ばせたいと思い、私は以前の職場を辞め、土曜日にも休みの所を探し、転職し、なるべく県外に行くようにしていますが、毎週だと、出費もかなり多く、毎日の生活をきりつめ

ての生活です。」

- ・「子供も今も外で遊べず、スイミングに週2回通わせ、ストレス発散させている状態です。」
- ・「放射能が高いため遠くの公園や他県の公園に良く行くが、ガソリン代もかかるため外で遊ぶことが月一回位しかできない。」

エ 他県産の食材・水の購入費用

他県産の食材や水の購入のため、食材費が高騰している（「食」参照）。

オ 租税、公共料金

事故後の租税や公共料金の負担に関する意見がある。

- ・「双葉、大熊 etc. は、自分達で原発に OK してきた人達に、これ以上保障しても意味がない！何の恩恵を受けていない私達は、何を持って福島県に住む意見があるのでしょうか？医療費無料とか税金を無税にするとか無いのでしょうか？」
- ・「この地を、他県の人々は汚染された場所、資産価値のないところとっておいででしょう。私も売ったって売れない土地と思っています。なのに、住民税や県民税は半年ほど前から、月に1万円も上がっています。固定資産税も15%しか下げてくれません。この土地に住んでるだけでも、ありがとうって言ってくれ！！と内心思っています。」
- ・「震災復こうのため税金 up、東北でとるのはおかしい。それ以外の出費がかかっている。しかも年数も長く、その間に次の災害がおこったらまた税金が上がるのか？と国への不満あり。」

カ 保険

ガン保険への加入を検討しているという意見や、心理カウンセリングの保険適用を求める意見があった。例えば、

- ・「やっぱり、健康面のサポートはもちろんの事、精神面であったり心の面が一番大事だと思います。心理カウンセリングは保険がきかないので、高額だったりするのでそういう面でももっとサポートが必要だと思います。子供たちの精神面も大事ですが、親が不安定になっていては子供をちゃんと育てあげることが出来なくなってしまうので、もっとそういう面でも不安を解消できる場所がもっと必要である。」
- ・「不安や心配ばかりかかえて、保険（ガン、子供用）を検討したり、庭のくさや土をとったり、頭をかかえています。」
- ・「子どもの放射線の影響について心配で、ガン保険に入れようか考えています。」

5.3 家計全体の特徴

アンケート対象者は、原発事故への対処するために様々な支出を行っている。例えば、放射能を避けるべく避難・保養した費用、内部被ばくを避けるために購入した食材・水の費用などである。その背景には情報に対する信用不安もある。

また、家計負担の増加は放射能への対処行動の結果生じたという因果関係を、アンケート対象者の自由回答から確認できる。そして、家計負担の増加を指摘する意見の多くは、同時に、賠償等による補填を求めている。〈被害の実態に応じた賠償等がなされていないのではないかと〉このような不安が、経済的な負担感を増幅し、行政・東電に対する信用不安をも生じさせている。それに加えて、消費税増税やガン保険の加入等による家計負担の増加も懸念されており、経済的な不安は今後も拡大する可能性がある。

6 子育て

6.1 遊び

子どもの遊びに関しては、①「外遊びをさせている」、②「外遊びを制限している」、③「室内遊び場」の3つに分かれる。このうち最も多い意見は「外遊びを制限している」、続けて「室内遊び場」で、最も少ないのが「外遊びをさせている」である。

ア 外遊びをさせている

子どもの外遊びについては、消極的な意見が多い中で、子どもに外遊びをさせているという意見があった。しかし、同時に、外遊びさせることによる健康不安を指摘する意見もあった。

- ・「学校や幼稚園は除染がすすみ、うちの周りで遊ばせるより全く低いので、学校や幼稚園の外遊びはさせています。新しく買ってあげた自転車のもままならず・・・。」
- ・「外遊びは幼児期の大切な経験だと思うので、できるだけ散歩などに連れて行っている。砂場（公園の）の砂の入れ替えもしてくれればよいと思う。」
- ・「公園に『除染をしている』という看板があると、子供達を安心して遊ばせられると思い、遊んでいいよと許可を出します。もし、その公園が手抜き除染されていたら・・・と思うだけでゾッとします。」
- ・「春に福島に戻り出産し、生活していますが、子供が成長するにつれ外遊びをするようになったり、道路にすわったり、道端の草花を摘んだりするようになりました。体の影響が心配ですがそれ以上にそれを止めさせることでの子供の精神的影響が心配でみてみないふりしている自分がイヤになることがあります。」
- ・「初めは、子供たちを外であそばせられなかったり、不安なコトがたくさんありましたが、今は、元気に、外であそぶコトも少しずつでき

るようになり、いろんな場所で、室内あそび場ができてきて、少しでも、子供たちにとって、良い方へいってくれればいいと思います。」

- ・「色々ありましたが、子供たちは今は元気に外で走り回って遊んでいます。福島に住んでいても今は不安は感じません。」
- ・「私は、外遊びなど、あまり気にせず、子どもを遊ばせていますが、あまり気にしなさ過ぎても他人の目があるので、程々にしか外遊びさせられません。」
- ・「最近は、戸外でも遊ぶようになったが、砂を触ったり、転んだりした時に、放射線がついてしまったのでは・・・？という不安もあり、ストレスやイライラの原因になってしまう。叱らなくてもいいことでつい叱ってしまうことも増え、子どももストレスになってしまうのではないかと心配になってしまう。」
- ・「この先、何年後に、放射能のえいきょうで子供達の体に何か起こるのではないかという不安があります。ここ、半年ぐらいは、外遊びも自由にさせてますが、本当に大丈夫なのかなあという不安はあります。もっと福島の子供達が自由に思いっきり体を動かす場所を作ってほしいです。」

イ 外遊びを制限している

子どもの外遊びについては、大半が消極的である。その理由は、放射能による健康不安である。同時に、外遊びしないことによる悪影響を指摘する意見もあった。

- ・「2年経った現在も外あそびは制限せざるを得ません。子どもに大切な自然に触れることを止めないといけない、風や空気・太陽の中でのびのび運動出来ないのは不健康ですよ…せめて、未来をになう子どもの成長を安全に楽しく育々と環境を整えてあげたいです。」
- ・「当時は娘も3才で1番外遊びしたがる時でした。その1番とても大切な時期に放射能の問題で苦しみました。1番大切な時期砂遊びや外

遊びの楽しさを知る時にそうできなかった事でこん後なにかと影響がでないか心配です。私も神経しつになりましたし、本当に2~3歳の子をもつ親にしかわからない苦しい思いをしました。」

- ・「子供は敏感です。原発事故前までは普通に外遊びをしていたのに、事故後、1ヶ月以上もの間家から出ることのない生活でした。私は理解できなくとも全て子供に話し、外では遊べない事も”ごめんね”と伝えました。それまで外で遊びたいと言っていた子供も、今では『外は危ないから中に入ろう』と下の子を誘ってくれるようになりました。外遊びをしない事が、どれほどストレスがたまるのか、心、体の発達に影響があるのではないかと、ずい分悩みました。事故後、少し落ちついてきてから、それまでの分を取り戻してあげたいと思い、県外に月に2~3回出かけ、外遊びをさせていました。お金はかかりますが、親も安心して遊ばせられ、子供も楽しそうです。」
- ・「幼稚園にこの春入園しますが、上の子たちと全く違う環境となってしまう、外遊びなどで、友達とのかかわりをもたないまま、入園となってしまうそうです。体力も、きっと低下しているのではないかと思います。今後、成長していく過程で、運動をさせるつもりでいますが、室内スポーツを考えています。やはり、今思うのは子供達に健康に生々と育ってほしいと強く思います。」
- ・「今となれば、放射能についてもななあになりつつあるようで、私は今も気にしてしまいましたが、時がたつにつれ、その気にする事をなかなか他人には言いつらくなってきてます。できるなら外遊びも短時間にしたい所も、学校や幼稚園では、他の親御さんは全く気にしないということも耳にするので、4月から幼稚園に通う際に、うちの子だけ・・・短時間で・・・とは言いつらいです。それは市の方できちんと対応を継続すべきだと思います。」
- ・「原発事故前は毎日子どもと散歩し公園で遊ぶのが日課でしたが、事故後、散歩することも公園に行くこともなくなりました。7才の子も

4才の子も毎日ゲームをするだけで外遊びをすることがなくなりました。子どもが外で遊びたがらないのです。きっと事故後ずっと外出を控えたり、外遊びをしていなかったからでしょう。運動不足も心配ですが、子どもたちが『外遊び=楽しい』ということを忘れてしまったことや外は遊ぶ場所でなく、放射能があって危ない場所と思っていることにとても悲しく思います。」

- ・「雪を見れば、子供たちは遊びたいだろうけれど、遊ばせるのに、何の不安もないはずが無く、雪遊び、外遊びが制限され、子供への説明にも困ります。子供は『毒なの?』と聞いてきます。そんな子供たちが、将来、自分の子供を持った時、どうなるのでしょうか?心が痛いです。」
- ・「家の除染もまだ始まらない今、外でめいいっぱい遊ばせたいという気持ちと本当に子ども達の体に影響がないのかという不安な気持ちがぶつかっている。子ども達と庭でサッカーをするのが楽しみだった夫も、『仕方ない』とキレイに生えそろうた芝をはがしているのみで少し切なくなった。」
- ・「原発後、外では遊べなくなりました。子供には外にはバイクンがいるから遊べないの!と言って聞かせました。(当時2才)マスクも出来るだけさせました。苦痛だったと思います。自分も、家に居る事が多くなりイライラして子供にあたってしまう事があり、毎日反省していました。今、現在は、長時間は、無理ですが、少しでも外でも遊ばせています。」
- ・「原発事故からしばらく経ち、線量も平常時と比較すれば除染した場所でも4倍以上はある(保育所は0.2ある)にもかかわらず、外遊びや雪遊びをさせてもいいか、アンケートを書かされて、親の確認を取り、遊ばせるという状況に疑問を感じています。」
- ・「通う予定の幼稚園ではまだ外遊びをしていません。気持ちとしては、30分程度でも伸びのびとしてほしいと思っていますが、そうもいか

ないようで、郡山市であれば市立全園同じで進めてほしいです。いつになれば遊べるのか、中でだけ1日中いるのでは何だか感性も育たなくなってしまう気がします。時間を決めて、そう願います。」

- ・「除染作業が進まず、外遊びが出来ません。自転車にも乗れないまま、小学校入学までに、自転車に補助なしで乗れるように練習させてあげたい。……放射能の影響を出来るだけ受けないよう、家の中で過ごすことが多いせいか、体力の低下（なわとびなどで体を動かすと、くちびるが紫色になったり、呼吸がみだれるので）心配です。」
- ・「今、子供が通っている認可外保育園は西日本産食材の給食で、外遊び（たまに）は線量の低い地域までバスで行き、普段は広い室内遊具で遊んでいます。2年後、小学生になりこの園を卒園した後のことが心配です。」
- ・「自分が小さい頃は、何時間でも外で思いっきりあそんだのに、自分の子供にはあふれる自然を感じる様な遊びをさせてあげられない。子供達の運動不足がさげられる中、より拍車がかかっている様に思う。」
- ・「外あそびも、自宅周辺の公園は除染が終わっているが芝生が新しくはえるまで立ち入り禁止となっており、あそべる状況ではなく、遊具のある遊び場に連れて行かなくてはならない。負担がある。何かにつけ『放射線だからダメ』という理由で、子供は『何で?』と言う思いがあると思う。今後、子供の成長・体力など、どのような影響が出てくるか心配。運動能力が低下しているのでは?」
- ・「外遊びが出来ないのが普通じゃないですね。……屋外での遊びの場の安全性確保。子どものいる施設は優先的に除染が進み数値はだいぶ低くなって来ているが、県外と比べてみるとまだ高い。どんぐりやまつばっくり、小枝や葉っぱなど 広い集めて無邪気に遊べるようになる日は本当に来るのかと思うと、気が重い。（子ども達の遊びたい気持ちを抑えつける事は出来ないから仕方なくやらせる→見ている親の気持ちは穏やかではない。周囲の目も気になる。→親にとって強いス

トレス→だから遊ばせないようにする→子供にとってストレス・不健全 こんな悪循環がいつまでも続く) こんな小さな不安は原発の是非を問う政治の場には全く届いていない。母親たちの小さな声を県内だけでなく全国レベルで吸い上げて大きな力に変えていけるような集約的な場が常時あったら良いと思う。あと3年もたてば、何ごともなかったようにすべてがウヤムヤにされる。それが一番こわい。」

- ・「小さい子供を持っている親は、子供達が外で自由に遊べないのもストレスだし(子も親も)、体力もおちているみたい 室内で遊べる施設がもっとあってもいいと思う 子供達が大人になって何も影響がないといいが、どうなるか(身体的・精神的に)誰もわからない としても不安です。何事もなかったかのように生活しているが、みんな不安・心配でたまらないと思う。」
- ・「私自身は気にしすぎることで逆に心身に良くないと考えているので、極端な放射能対策はしていません。でも、近所の公園(除染未実施)で遊ばせることには抵抗があり、子供たちに外遊びをあまりさせられません。」
- ・「保育所に通っていますが、事故から1年以上外遊びがなかなか出来ないでいましたが、先生方の努力と工夫で楽しく通っていました。現在は、あまり放射能の事を気にすることなく生活をしています。」
- ・「地震があっても、テレビの映像を見ても、不安がる子はいないので、外遊びが大好きなのに、あまり外で遊ばせられないのが、かわいそうだと思います。できる限り、休みの日に線量の低い所へ行って遊んでくるようにしていますが、時間もお金も、限りがあります。早く除染が進んで、何の心配もなく外に出られる、庭で遊べる日が来ることを期待しています。」
- ・「現在、幼稚園で教員をしています。日々の保育の中で 戸外遊びが制限されており、子どもたちの身体面、精神面での育ちが非常に心配です。それに代わる様、いろいろと工夫、配慮はしていますが、や

はり、自然には勝てないのだと痛感しており、1日も早く元通りの子どもたちの生活を取り戻したいと願うばかりです。」

- ・「原発事故後、子供達を外で遊ばせることが無意識になくなりました。学校や幼稚園でも外遊びの時間は決められ、今までとは全く生活習慣ががらりと変わり、子供達にも多少ストレスがあるように思います。」
- ・「震災前と同じ生活はいつになったらできるのだろう……。毎日のように散歩がてら公園まで行って遊んだり……。何も気にせず、外で子供たちを遊ばせたい。保育園でも外遊びは30分、除染はしているものの限られた時間しか外にでられないのは悲しい。いくら屋内の遊び場所が増えたとしても、外で遊ぶのとは感覚が違う。」

ウ 室内遊び場

室内遊び場に対する要望や不満があった。例えば、設置数や場所、遊びの内容、利用料、衛生面の心配等である。

- ・「室内遊び場を増やすのはいいですけど、ボールプールなどの衛生面が非常に気になります。秋～冬にかけてはノロやインフルなど感染症が多い時期です。赤ちゃんがなめたままのボール、よだれなど、大変気になります。作るのはいいんですけど、ただ遊べればいいってわけにはいかないと思います。細めに消毒している場面は全く見られません。駐車場も少ない。」
- ・「小さい子が屋内で遊ぶ所はいくつかありますが、6歳の長女にはつまらないと言われるので、なかなか家族で利用するにはむずかしいかなとも思います。広くていっぱい走りまわれるような所も作ってほしいです。(小学生高学年でも遊べるような)」
- ・「事故後外で遊ばせる機会が減り室内遊具場など各市ごとにはできているが小さくても各町（各地区）ごとに室内遊具場をつくってほしい。」

- ・「二本松市近辺に、屋内で遊べる場所が少なく、プール也没有せん。私個人としては、放射能の心配ではなく、冬場でも遊べる場所があるとうれしいと思っています。」
- ・「外で遊ばせる機会が減った事が本当に残念ですが、郡山市が屋内遊技場『ベップキッズ郡山』を作ってくれた事は大変助かる点もありましたが、今は寒い時期にたっぷり遊ばせられる場所としての認識です。」
- ・「福島市から、しつない遊び場は、どう作るべきか？などのアンケートをはいふすべきです。自分達の勝手な思いで室内のおもちゃや遊具をおいている。実際、子供達の親の意見をもって、もっときくべきだ。今まで一度も福島からアンケートなんてきたことありません。……室内あそび場も、赤ちゃんむけばかりで、走りまわりたい2~5才児のあそび場を作ってほしい。砂いじりのしせつばかりで、子供は走りたんです。ゆうぐがなくとも、ただ、全力で走りたんです。走る場所をください。」
- ・「語り合う場より、子供が思い切りあそべる施設を二本松市に作ってほしい。安達ヶ原にある室内施設の温度は『マイナス 1℃』だと聞いて行く気になれない。本宮市まで行けば何ヶ所かあるが、毎日車を使って行くのも大変。あえて語り合う場を作るより子供が遊べる施設を作った方が、親が自然に集まって話せるのではないかと思う。」
- ・「今、福島には子ども制限がされ、小学生とかが遊べない場所がたっています。小さい子ども達は十分に遊べていると思います。小学生以上がたくさん遊べるような施設を作ってほしいと思っています（たぶん無理でしょうが・・・）子ども達はとってもストレスがたまっています。その解消方法が知りたいです。」
- ・「郡山市にきて、児童館がないことにおどろいた。小さな子が遊びに行ける室内はあるが、小学校が気軽に集まれる場がない。天気の良い日はどこで遊べばいいのか……。以前くらしていた仙台市は、学区

ごとにホールもあり、図書館もある児童館があったので、たいへん便利で皆活用していた。原発事故後、せめて児童館があればいいと思うことが多い。ぜひ作ってほしい。」

エ 特徴

子どもの遊びに関する意見の中には、次のような不安を指摘するものが多い。

外遊びさせる：放射能による健康被害

外遊びさせない：運動能力や人格形成への悪影響、子どもや親のストレス等

アンケート対象者の多くは、この2つの間に苦渋に満ちた選択を迫られている。どちらの選択をしても、どちらかの不安が残る過酷な結果となる。多くの意見にこの葛藤を抱え、不安がる親の気持ちが表れている。

このような葛藤から回避するために、室内遊び場に対する強い関心が向けられている。室内遊び場は、子どものストレス解消など、外遊びの代わりになるものとして期待されている。例えば、身体を動かすことが可能な屋内施設を望む意見は、運動能力への悪影響を断ち切ろうとするものといえる。このように、室内遊び場には外遊びの代わりになる側面があることから、施設数や内容等に対する要望は多い。

しかし、屋外でしか体験できないことがあるとして、室内遊び場の限界を指摘する意見もある。例えば、「外遊びは大切です。草や木や花、虫や鳥がいて、興味のある物がたくさんあります。室内で遊べる場を作っていたのですが、あまりに人が多すぎて逆に感染の方が気になりました。おもちゃも数にかぎりがありますし、生きてうごいている物にはかえないません。」という意見は、このことを指摘するものである。このような観点から子どもの遊びについて考えると、不安は解消されていないという実態

を浮き彫りにしている。

さらに、子どもに不自由な思いをさせることで心痛を受けている親も少なくない。例えば、「一番多感な時期に外遊び（すな遊びや散歩など）をさせてあげられなかったのが非常につらいです」という意見は、このような心痛を率直に指摘するものである。

6.2 放射能対応

子どもの放射能対応に関する意見は、①「子どもの検査」、②「積算計（ガラスバッジ）」の2つに分けられる。

ア 子どもの検査

子どもの検査については、検査に対する不信、検査結果に対する不安、検査の要望等がある。

- ・「子供が4人います。1人目の高1の娘と2人目の中1の息子が甲状腺の検査をして、のう胞がありました。……次の検査は2年後となっていますが、本当にほおっておいて大丈夫なのか不安です。例えば、大人の乳ガン検査などで、のう胞らしき物が見つかったとしても、2年もおいておかないと思います。」
- ・「原発事故～1年くらいまでは、放射能による影響について知識が乏しくあまり深く考えていませんでした。しかし、子供の甲状腺エコーの結果、A2判定で嚢胞があることを知り、だんだん怖くなっていきました。そして、無知でおろかな自分を責めました。何故あの時逃難しなかったのか、何故あの時子供を外に出してしまったのか。たぶん、この後悔は私が死ぬまでずっと続くのだろうと思います。」
- ・「家の子供は4才と2才でまだ小さいので甲状腺検査とかホールボディなど成長に合わせて成人するまで検査してほしいと思います。」

- ・「福島以外、東京や大阪などの放射線量や甲状腺を調べて、福島とどれくらいの違いがあるのか教えて欲しいです。」
- ・「先日、甲状腺検査の結果で、A2と長男が診断され、それはもううがあるが大丈夫との事でした。しかし親は、大丈夫だとはとうてい思えません。もう一度検査しようにも、自費で高い医療費を払い、基本的にはしないと言われました。うわさではどの病院も口裏をあわせているとの事。どの情報を信じればいいのかわからないのが現状である事を知ってもらいたいです。」
- ・「原発事故に関して、甲状腺検査は実施しました。しかし、それ以外にも、もう少し詳しい検査を定期的実施してほしいです。これから何年後か子供に何かあるか考えると、とても不安です。何か出てきた時、国などの対応などどうなっているのか。だんだん原発に関しての情報が減ってきているような気がします。子供が何もなく元気に育ってくれる事を願うばかりです。」
- ・「内部被ばくの検査の結果も、今は大丈夫とか、異常があって、不安をあおる結果でも、問題なし。何が問題なしなのか。やった意味があるのか？会社を休んで行って、さんざん待って数値が出ていても今の所問題なし、じゃあやる意味って？質問しても、ほしい答えはもらえず、あいまいな返答ばかり。私達が本当に望んでいる事に目をむけてほしい。表面上のお仕事はいいです。」
- ・「ホールボディカウンターや甲状腺検査も今始まったばかり。対応が遅すぎます。国は地方自治体に任せ過ぎてはいなかったでしょうか？」
- ・「内部被曝検査の継続実施や甲状腺検査結果や各種検査結果の継続的公表。特に見たいときすぐ見られるようなサイトの開設や地域別のデータベース作成など。」
- ・「子供の健康診断を、定期的実施してほしいです。甲状腺の検査など。もし異常があった場合など、補償が必要だと思います。」

- ・「小学生の長女・次女が甲状腺の検査で、A2の結果で、少し心配があります。福島の子どもと比較する為にも、他の県の子どもたちの検査もしてほしい。」
- ・「一番上の息子と二番目の娘には、甲状腺検査で A2 (20mm 以下のうほうがある。再検査の必要なし) の検査結果が出たり、2 番目の娘の頭に、昨年 10 月頃より、円形脱毛症がみられたり、一番下の娘には、昨日、白髪 1 本みつけれたり・・・と何かにつけ原発の影響を不安に思う日々が続いています。」
- ・「県外避難者(子)への健康診断(甲状腺検査、ホールディングカウンター)をもっと早くして欲しいと今も要望しています。」
- ・「ホールボディカウンターでの検査では 3 人の子供全員心配ない結果で一安心でしたが、甲状腺の検査にて、上の子 2 人(14 才、8 才)が A2 判定でした。『成長期によくあること』と説明文がありましたが、かなり不安になりました。精神的にもやや落ち着きはじめて矢先だったため、母親としてものごく落ち込みました。うちは、事故後家族の意見もそろわず避難しませんでした。そのせいなのかと。検査結果後の再検査は 2 年後、子供の成長速度で、それで大丈夫なのか？と思います。今すぐ避難はしたいと思いつながら、仕事、学校、お金、家のこと、親のこと、悩むところです。A2 判定について、まともに相談できる先もわからず悶々としします。半ばあきらめて少しずつ落ちついた感じです。」
- ・「震災時妊娠中でお腹の中にいた子供に甲状腺検査をさせなくてよいのか心配です。(現在行われているのは震災時出生していた子のみ対象なので)」
- ・「原発事故後、会社を休まなくても良い休み(有給)が増えた。例えば、子供の甲状腺や、内部被ばく検査など、本来なら、やらなくては、良い検査を、行う事により、会社を休む事になり、(子供のつきそいで)有給がへってきている。3 人の子供がいると、それぞれ検査の日

程も違うので・・・。」

- ・「いつでも甲状腺検査、ホールディングカウンターの検査ができる環境を作って頂きたいです。その場で結果の説明や相談のできる、専門の方がいてほしいです。そこで待っている間に、他のお母さん達と話ができと思うので、無料で検査できる場があればと思います。」
- ・「甲状腺にのう胞があっても追加の検査をしようとしなない県や国に対し、憤りを感じる。2年後の検査まで何もするなと言われ、それを鵜呑みにして本当に良いのかが判断できない。怒り自体、どこにぶつけていいのか・・・。」
- ・「市で行っている被爆検査、甲状腺検査、県民健康調査等いろいろありますが、私のまわりでは誰一人その結果を信用している人はいません。原発事故時に被爆させられたという思いしかないのです。」
- ・「甲状腺等の検査を各市町村で行っていますが、常の不安にはかえられないと思います。もっと自宅で簡単に毎日数値をはかったり、甲状腺の様子を頻繁に調べられるものがあればある程度の不安は解消されるのではと思います。小さな子供がいる人はみんな不安だと思うので、その不安をできるだけなくしてほしいと思います。」

イ 積算計（ガラスバッジ）

積算計の不満や別の機器の貸し出しを希望する意見があった。

- ・「ガラスバッジは常に身に付けているのがむずかしい。もっと時計型（ブレスレット、アンワレット）にするなど考えてほしい。首にぶらさげているのは他県や外出先で福島をアピールしている様で視線がきになる。持ち歩くのがいやになった。」
- ・「何が安全で何が安全ではないのか、正直わかりません。子供を守る、成長させるのは親の責任だとは思いますが、原発事故の前例がないため、仕方がないのでしょうか・・・。ガラスバッジを付け生活し、甲状腺検査など受けていますが、子供は時々実験台にされているよう

な・・・。」

ウ 特徴

全体的に子どもの検査に対する不信と要望が多い。放射能による子どもの健康被害が強く懸念されていることが伺える。検査の要望については「社会保障」でその特徴を述べることとし、ここでは検査不信に関する特徴について述べる。

意見の中には、検査自体の信用性を疑うものや、検査結果に対する不安を指摘するものが多数に上る。その理由は、検査主体の説明不足などにより、母親が検査に関する正確な情報を把握できないところにある。これは情報不信の一種といえる。その結果、検査そのものとその結果に対する信頼が揺らいでおり、それが健康被害の不安に結びついている。この不安は、子どもの将来の健康に関する不安であり、しかも子どもが成人し、次世代につなげるまで継続する性質のものであるから、簡単には解消できるものではない。したがって、個々の検査においては十分な説明を行うなどして、上記のような不安を解消するためには長期にわたる継続的な取り組みが必要である。

6.3 出産

出産に関する意見は、①「妊娠」、②「流産」の2つに分けられる。

ア 妊娠

福島で妊娠または妊娠中を過ごすことについて不安を感じている。

- ・「私は、現在妊娠しています。原発事故で、妊娠する事をあきらめてしまった友人、知人沢山います。本当に切ない気持ちになります。」
- ・「震災時は、仙台に住んでおり、夫の転勤でH23年6月末に福島に戻ってきました。転勤が分かり、引っ越しする直前に妊娠しているこ

とが分りました……。放射能の影響を考えると子どものためには、仙台のままに居た方が良かったのかもしれないと悩む日々です。」

- ・「震災当時は、妊娠中だったため、小さい子どもとこれから産まれてくるわが子の将来にかなり不安を感じましたが、避難をするということが難しく当時はかなり悩みました。悩んでばかりもいられないのが現実です。母親が不安だと子ども達はさらに不安だと思います。これからどうなるかは分かりませんが、私は、この町で生活続け、子ども達を育てていくつもりです。気にしても仕方がない。楽観的かもしれませんが、悩んでいるよりも、精神的、身体的に良いと思います。」
- ・「震災当時、妊娠しており、かなり不安を持ちながら、職場、家とすごしておりました。このような事態となり、育休を延長し、子どもたちとの時間を増やしたのも事実です。福島での生活を選択したものの、生活していくことに本当に大丈夫なのか、子どもたちの未来は大丈夫なのかと、不安はつきません。でも自分たちの選択がまちがっていなかったと思い生活していくしかありません。この選択する他に方法がなかったのですから……。今後も、考え方が変化していくことはあっても、その時での選択は本当に精一杯です。」
- ・「妊娠中も私は食べものとか（県内のもの）はあまり気にしないほうでした。でも、頭のかたすみでは、震災後ずっと放射能のことが気になっていて頭はもんもんとしたままでストレスをかんじます！」

イ 流産

放射能が流産に影響した可能性を一生抱えていかなければならない苦しみをもつ人が存在する。

- ・「原発事故(震災)後、妊娠をしました。そして死産しました。……、原発事故直後この放射能の大変さが分からず、まだ住んだばかりの自宅前の環境を良くしようと、林の木を伐採したり、うっそうとした背高位の草木を刈ったりと数週に渡り、夫とそして時にまだ2才だった

子供と作業しました。その時にどれだけ外部被曝したのか……。私の死産はもしかしたらそれが原因かも……。この可能性は一生抱え、時に死産した苦しみと共に後悔をわき上がらせます。」

ウ 特徴

出産に関しては、福島で妊娠すること、妊娠中を過ごすことについて不安を抱いている。放射能が胎児に悪影響を及ぼすことを懸念する不安である。出産を躊躇する意見もあり、影響は大きい。情報に対する信用不安が原因となっている可能性がある。

また、放射能が流産（死産）の一因となっている疑念を払拭できないという心理的ダメージを受けていることを指摘する意見があった。これも情報に対する信用不安が原因となっている可能性がある。

6.4 その他子育てに関する不安

子育てに関する不安は多種多様である。

- ・「やはり、まだまだ不安の中で子育てをしているという事をわかってもらいたい。今後の不安は無くなりません。」
- ・「福島に住む子育て中の親は誰も今回の原発事故について不安や悩みを抱えているのは事実です。しかし、現状は原発や放射能に関する話題を話そうとすると嫌な空気になり、話したくても話せない状況です。」
- ・「原発事故後は子育てに不安がある生活になってしまいました。経済力も力もない私は、この地で一生生活していきます。しかし、将来、子供達に肉体的・精神的ないたみをさせてしまうのかと、不安になってしまいます。」
- ・「親が怖いと思えば、子供が不安に成るので、前向きに生活して子育てをして行きたいと思います。」

- ・「全く先の見えない中での子育ては将来のある子供達にとってどれだけ影響があるのか心配と不安でいっぱいです。」
- ・「原発事故以降、子育て支援センターに行く機会がふえました。外あそびをさせられない為、センターで子供を遊ばせたいと同時に同じような状況のママ達と話す事で私自身気持ちが楽になるからです。」
- ・「自分の意思で福島で生きてゆくとは決めましたが、やはり県外に出ると自分の判断は間違いではなかったか？と思う時があります。そう思う自分もいやなので、福島で同じ境遇の中子育てしている人という方が気持ちがおちつくので、県外に行くのもお金がかかるし、最近はや遠のいてしまいました。」
- ・「我が家はもう線量は測っていません。(以前住んでいた全壊した家は測っていました。)理由は数値を追っても生活上、何の意味も持たないからです。数値を知っても、ここで生活を続けなければいけない者にとって、不安にしかならない。(子どもをできるだけ外へ出さないことは変わらないので。)」
- ・「原発事故後、子供達としばらく山形へ避難していました。家族はなればなれになり、1人で3人の子供の生活の責任を持ち、4人目の妊娠、子供達も辛かったと思います。自分も周囲に頼る人がないため不安な毎日でした。」
- ・「震災前と後では、考え方も子供に対しても何もかも変わってしまったように思う。特に子供(子育て)に関しては、できなくなってしまったことを考えると、くやしく絶望的な気持ちになることも、今もお多い毎日。子供の将来の健康も心配だし、毎日の野菜・食べ物・水選び、遊ぶところをえらび、そのたびに不安になります。でも、子供たちに不安な自分は見せられないので、何とか気持ちをおちつかせながら、できることを気をつけてやっ払いこうと、ふるいたたせています。そのくりかえしで、精神的につかれてしまい眠れなくなる日もあります。でも！！子供を守る私たち親たちが、納得して、気をつけながら、

ここですごしていけるように、考えて行動していくしかないですよ
ね。価値観のちかう方々となら、いろいろ語り合える場があるのなら、
とても支えになり助けられることが多いと思います。」

- ・「子供が国の宝であるならば、もっと本気で福島の子供達を考えてい
ただきたいです。私は3人目を妊娠8ヶ月で震災にあいました。3人
目を出産、育てる中で、こんなストレスを感じた事はありません。体
力的、精神的に3人の子育ては大変です。それに加えて放射線のスト
レス・・・本当に辛いです。」
- ・「子育てに関する不安について、同地域に住んでいる人同士でも考え
方が異なり、不安ならば県外に住めば良いと考える人や気にしてない
ことを強調する人など、悩んでいることを口に出せない風潮があり、
悩んでいるのは少数なのか?と思う事がある。除染、子供の健康への
不安解消など、行政、国の対応を迅速にお願いしたい。」
- ・「直後に比べて、全体的に現在は色々な不安や心配をしていない、と
私はアンケートで丸をつけましたが、(それはある意味事実なのです
が) そうしていないと、そう思いこまないとこの土地に住み続けると
いう決断ができないですし、日々不安にかられていては子育てはでき
ないので、思いこもうとしている所があります。その為、ネットやTV
等で低線量被曝の影響についてのことを聞いたり、遠くまで避難して
いる人の話を聞くたびに、はげしく落ちこみ、不安にかられます。次
の日には元気になりますが、そのような気持ちの浮き沈みを抱えつつ
も、全体で見れば・・・という意味での解答です。」
- ・「県外に避難しています。やはり福島で子育てをするのはまだ不安を
感じます。家計は苦しくなりますが後から後悔したくないと思い避難
を決めました。この子が1年生になるまでは県外にいる予定です。そ
の後は様子をみて決めようと思います。」
- ・「『原発事故や子育てに関する不安を自由に語り合う場』へ出向くの
は、ものすごく不安を持っている方達のような気がします。私のよう

に、不安ではあるけども大丈夫かもしれない・・・でも、大丈夫じゃないかもしれない・・・と、どっちつかずの人はなかなか参加する気になるのは難しいです。いろいろ考えてもいろんなことが矛盾しているような事態です。もう気にしないでいよう、と思ってもいや、気にしないでいようと思うことがもうまずいんじゃないか、とか。」

- ・「同じ地域に住んでいる方々との交流も元々少ない地域なだけに、もっと交流の持てる地域であつたら良いのに・・・と思う。育児に対して、原発事故に対しての交流だけでなく、地域のコミュニケーション力が高まるような地域になれば子育てもしやすくなると思う。」
- ・「大好きな福島で安心した子育てができないことが残念で仕方ありません。毎日毎日、放射能を意識しない日はありません。子供たちの健康への不安も同じです。」
- ・「夫にも本音を言にくいところもあります。福島にきて5年。仕事もせず、妊娠・子育て、と外とつながっていなかったこともあり、友達もおらず、原発事故や放射能への不安など、悩みを話せる人もいません。(例えいても、現在の福島の雰囲気では、不安など表に出せないかなあ・・・) もう、事故は起きてしまって、時計の針は戻りません。だから考えても仕方ないと分かっているけど、『なぜ・・・』『どうして・・・』ばかりで前向きになれずにいます。……また、先日報道された『福島の子どもの肥満傾向が高い』というニュースも、母親を追いつめるものです。福島で生活するお母さんたちも、できるだけ運動させようと努力しています。今後、子どもたちの体力測定の結果などのニュースに接するのが怖いんです。私たちはこれ以上何をしたらいいんでしょうか。」

7 人間関係

7.1 夫婦・親族

夫婦や親族との間に考え方の違いがある。その結果、ストレスを感じたり、関係が悪化したりする場合がある。

- ・「夫と避難するしないでけんかになりました。小学校に入ったばかりの上の子のことを考えると環境変化にともなうストレスを考えて避難できないという意見に『母親失格』といわれました。今でもその考えのちがいは平行線のままです。夫婦仲もあまりうまくいなくなり、子どもたちにストレスを与えてしまっています。」
- ・「どうしても義父や義母は原発の危険なことを理解してくれないので相談しにくい状況です。」
- ・「子供を両親にまかせて避難してもらったが、両親とは原発の考え方や両親も病気をもっている為、長い期間の避難はできなかった。」
- ・「原発事故直後は、私の考えと夫の考え、義両親の考え方の違いに悩みました。」
- ・「放射能が安全かそうでないか、夫と夫の両親との認識のズレがあり、とてもつらかった。」
- ・「本当に大丈夫なのかすごく不安です。しかし、福島にいと皆段々気にしなくなっていて、自分だけが気にしすぎているのかと不安になります。夫もこの地から離れる気はなく、ひなんするなら離婚すると言われており、ひなんがいきずに今に至ります。」

7.2 近所・知人

近所の友人や知人との間に考え方の違いがある。その結果、ストレスを感じたり、関係が悪化したりする場合がある。

- ・「同じ福島県内でも、以前住んでいた場所・現在住んでいる場所、個

人の性格によっても、自分を含め、母親達にはかなりの温度差があります。」

- ・「福島では震災後から本当に苦しんでいる母親たちがたくさんいると思います。私もその1人です。ですが、その一方で『もう昔の事、そんなに考えてもしょうがない』と放射能の事を話すことすら嫌がる母親たちもいます。その考え方の違いは本当に今まで築いてきた親子関係、友人関係をこわしてしまいました。」
- ・「放射能に対する考え方の差が大きすぎて、不安を口に出すことがなかなかできなくなってしまいました。」
- ・「私どもは転勤族で地元の方たちとも少し考え方は違うようです。また原発の事故の影響（子供への）はそれぞれ考え方が違うのであまり深い話はしません。自分の考えを押し付けてもいいけないし。ただ二年が経とうとする今、福島にいる＝仲間みたいな感じです。」
- ・「この先も大丈夫と思っているママと、不安をかかえながらしょうがなく住んでいるママと移住計画中のママが語り合うなんて戦争。」
- ・「事故後、放射線の影響についてはそれぞれの家庭で考え方が違い、とまどうことが多いです。気にする、気にしない、食べる、食べない……。育児だけでもそれぞれ価値観が違う上に、放射線のことも重なり、今でも話題にすることに対して気にしてしまいます。事故一年間は特に話をしたくないと思ったものです。不安は取りのぞけないだろうと思います。」
- ・「原発事故に対しての考え方や不安は人それぞれだと思います。でも、事故後、普通に野焼きをしている住民などを見ると、放射能について知らないのか・・・とガッカリしていました。」
- ・「原発事故以来、改めてどんな事に対しても様々な意見が有り、全ての人を満たすことは難しいと強く感じるようになりました。譲り合ったり、思い合ったりできれば何よりですが、難しければ否定しあうのではなく、そういう考え方もあるのだと折り合いをつけて行くよう努

めて行けたらな、と思います。本当にいろいろな人がいます。震災後、本当にいろいろ考えました。」

- ・「原発事故への考えをめぐり友人を何人も失ったという話は、けっしてめずらしくはない。」
- ・「1番心苦しかったのは、周りのお母さん達との考え方がちがう時、子供がその事で友達に何か言われたり（どうしてカゼじゃないのにマスクしてんの？等）した時でした。集団生活の中での大変さがありました。」

7.3 外部

「福島」出身者に対する差別や偏見の不安がある。内容としては、結婚や就職等の際に不利益を受ける可能性を指摘するものが多い。

- ・「夫の仕事も、福島ナンバーを見た関東の人が、『放射能が移る！！』と捨てぜりふを言われ、すごく不愉快な思いをして、出かけるのもそれから嫌になり、こわかったので、今でも他県の人が信じられないし、嫌いです・・・。」
- ・「この先、結婚する年令をむかえた時にも、原発のあった、福島の子だからと、相手の方からけねんされることはないだろうとか、考えれば、考えるだけ問題はつきないのですが・・・。」
- ・「子供を見ていると『このままで良いのか？何をすれば良いのか？子供の将来はどうなるの？放射能のせいで結婚出来ない？親として責任を持てるの？』と自問自答の繰り返しです。」
- ・「心配なことは、子供たちが就職や進学先、結婚で不利益をこうむらないかということです。福島で生きていることは、他の地域で生きることとほとんど違いがありません。普通に暮らしています。まあ、今、住んでいる人たちは、もう気にするのもやめた思考停止の人たちと言われればそうかもしれませんが。あんまり気にしすぎると、そのこと

でストレスになって心身に良いコトはなさそうです。子供たち2人には市内で結婚相手を見つけてほしいものです（笑）」

- ・「今現在、表向きは元気に生活している様にみえるが、20年、30年後に結婚、子供・・・と言う話になるときが来たら、もし、相手の方が現在の福島と関係のうすい方だった時、将来生まれてくる子供の事を考えて、相手方のご両親に反対されないだろうか？」
- ・「放射能のことをもっと知ろうとネットを見ると、……『福島に住んでいる子供は病気で死ぬか大人になっても結婚できない、子供を産めない』などといった書き込みが沢山あり、怒りと共にもっと不安な気持ちでいっぱいになりました。」
- ・「正しくない意見が1人歩きして、健康被害ではなく『偏見』という心の被害が1番恐いです。」
- ・「賠償金の請求額が一律なので、子供と一緒に知らない人に勝手に請求額を計算され、多くもらっていると嫌味を言われ、とても不快な思いをしました。」

7.4 避難・賠償の取り扱いに差異のある人

行政や東電が行った賠償・補償の線引きに対し、他人が優遇されていると感じ、その恩恵を受けている人に対して怒り等を感じるという意見があった。

- ・「(大部分は)福島県民は東京電力会社を相手に、やれ賠償金だ、補償金だと言いつぎではありませんか？岩手県・宮城県の方々は何もかもなくして賠償金も補償もないまま、自らの手で復興に向かっていきます。パチンコ屋に平日駐車してある車のナンバーは『いわき』ナンバーが増えているのを見ると、正直憤りを感じます。何の補償もない。子供たちの将来の事を補償してくれ！！それだけです。」
- ・「原発事故直後から政府や専門家の『健康に影響が出るレベルではな

い』という言葉信じて今まで生活してきているため、自主避難している人達がわがままに見えて仕方ありません。」

- ・「津波や原発のひなん区域の人ばかりがいい思いをしている。お金もらって、働かずパチンコ行って時間をつぶしているのが現状。家が残ればそれでOK、終わりなのか。なっとくいかない。同じ福島なのに。家がなくなる、家族がいなくなる。それ以上、悲しいことがないのは分かるが、あまりにも浜通りに住んでる人とその他に住んでる人の差がありすぎる。バカバカしい。」

7.5 特徴

原発事故は人間関係に重大な変化をもたらしている。その根底には、①原発事故や放射能をめぐる考え方に違いと②賠償の線引きに対する不公平感がある。①については、第1に、原発事故後の対処行動、例えば、避難するかどうかなどに関して、相談・議論するような関係にある者との間の人間関係に影響を及ぼしている。考え方の違いがあることを認識した場合、「近所・知人」の関係であれば、〈相談や議論をやめる〉といった対応が一応可能である。ただ、この場合においても、本音や不安を口にすることができない、考え方を押し付けられるというストレスが生じている。

これに対し、「夫婦・親族」との間では、〈相談や議論をやめる〉といった対応が難しい場合がある。特に、共同生活を営んでいる夫婦は、相談や議論することが避けられない。そのため、意見の対立によるストレスや関係の悪化・破綻が生じやすい。現に離婚にまで発展している意見もある。人間関係の破綻は、その過程および結果において重大なストレスが生じる上、家庭によっては経済的な不安が増幅されるなどの派生的な被害が生じることとなる。

第2に、放射能の影響を受けていない、いわば「外部」との間では、汚染によるスティグマへの恐れがあり、それによる差別や偏見が生じること

を危惧している。すなわち、〈「福島出身者」ということで、嫌がらせを受けたり、結婚・就職・進学などの際に理不尽な扱いを受けたりするのではないか〉という不安である。この意見は相当数に上る。他人からどのような扱いを受けるかということは子どもの人格形成にも関係することであり、その不利益を受けるのも子どもであることから、子どもの幸福を願う親としては、子どもの将来の健康不安と同じように、子どもの将来に対して不安を抱くのであろう。

②については、賠償の線引きに不公平さを感じ、自分よりも優遇されている人に対する悪感情・蔑視感情を有することが伺える意見がある。このような差別感情を抱いたのは個人であるが、原発事故がなければこのような差別も生じなかったのであるから、原発事故がもたらす被害の一つといえる。

8 情報

8.1 情報の収集

情報の収集に関する意見は、①「情報不信」、②「関心の低下」の2つに分けられる。

ア 情報不信

情報不信については、流通している情報の矛盾、行政や東電に対する不信等が指摘されている。

- ・「テレビや新聞、ラジオでは、『大丈夫!』という事だったり、『このままではダメだ!』という事だったり、どれを信じていいのかわかりません。しかし、子供達を守るのは私達両親です。本当の事を言ってほしいと常々思います。」
- ・「原発事故の事や放射能の事についていろんな人達が、それぞれいろんな意見を言っているののでいったい誰の言っている事を信じたらいい

のか分らないです。」

- ・「国も東電も自治体も、自分達を良くみせようとするパフォーマンスばかりで、本当に福島の人のことを考えてくれているとは思えません。それに、後になってから SPEED1 の情報が住民に伝えられず破棄されたり、不適切な除染が行われたりしても、県民を危険にさらしても誰も罪に問われないのは何故でしょうか？ 原発事故以来、人を信じることができなくなりました。」
- ・「いくら安全と言われても、原発直後から、政治家の方からうそをつかれて、何が本当で何がウソか今だに信用できない状況です。放射能、大丈夫という先生もいれば、大丈夫ではないという先生もいます。」
- ・「専門家の意見も 180 度違うという中で、自分達の決めた県外避難が正しい選択だったのか、私には分かりません。ただ事故の前に、年間被爆が 1 ミリと決めていたのだから、そこはきちんと守ってほしかったというのが私の正直な気持ちです。」
- ・「先日、TV でも言っていましたが、私が求める答えは『大丈夫です、心配いらないです』という言葉ではなく、万が一のことを伝えてもらうこと（この先考えられる病気や影響などをはっきりと言ってもらうこと）なのです。今までにデータがない事故なのだから、専門家だって分からないはずなのになぜ大丈夫だと言えるのか・・・？ チェルノブイリではガンよりも他の病気にかかる率が、やはり被爆してる子どもの方が高いとか？！ そういう情報をきちんと教えてほしい。」
- ・「私の住んでいる所でも線量が高いのに、国や市、東電は大丈夫だといいい続け、それを信用した自分が情けないです。事故直後から避難していればと今でも後悔しています。何が正しくて何がまちがっているのか、自分の判断は正しかったのかと今でも悩むことがあります。」
- ・「たしかに除染等の活動は、行われていますが、それがまわってくるまでに、時間もかかりすぎているし、今さら、という声もまわりで聞こえています。どの位の数字が安全なのかも、それが本当の数字なの

かも信用できないのが本音です。』

- ・「どこに行っても、震災前と現在を比べた違いの説明が分かりづらすぎる！専門用語で話されてもわからない。何もわからない状態の者に説明するという意識がない。不安をあおっている事に気付いていないと思う。だって、説明が難しすぎるから。何がどう大丈夫なのか、以前はどのくらいの放射能が舞っていたのか、何がだめなのか、どうすればいいのか、検査だ、何だと、結果すらわかりづらい！！ 本当に一般人の事を考えているのか……。子供達の事を考えているのか……。不安になる。」
- ・「何の根拠もないのに、安全だ、大丈夫だ、安心して、と公に言うのはやめてほしい。危ないなら危ないと、きちんと伝えてもらった方が、子供や家族を守るために対策を考えるし、まわりとも協力できる。隠したり、ごまかしたりするから信用できなくなるし、まわりともギクシャクする。」
- ・「放射能汚染、それに関わる健康被害については、世界的にみても経験の少ないことです。そして専門家の方々においても意見は違ったり、知ろうとするほど混乱も多いのではないのでしょうか。中でもインターネットの情報は信用性のないものも沢山ありますが、自分の信じたい情報を信じ、受け入れてしまう人も沢山いるように感じます。難しいことだとは思いますが、正しい情報、信用性の高い情報の整理をして、インターネットも含め、これからも発信していただければと思います。」
- ・「原発周辺の子どもから、甲状腺に異常がみられたと聞きます。事故とは無関係と言いますが、あまり信じていません。そういう事が、これからも増え、『チェルノブイリと同じだった。』と言う事になりそうだと思ってしまいます。そういう事も、受け入れなければならぬのが避難しなかった私たちのこれからの不安です。」

イ 関心の低下

原発事故や放射能をめぐる事柄について関心が低下している。その原因としては、時の経過による慣れ、不安の防止（考えると不安になる、忘れない）が指摘されている。

- ・「事故から2年も経つというのに将来への不安が残るだけで、何も変わっていないのが現状です。であるならば、むしろ事故を忘れない。そっとしておいてほしいのです。」
- ・「何も変わっていないのに、今の現状に慣れていくのが不安でもあり、落ち着いて（安心となる）しまうので、かっとうします。日々、どうしたらいいが分からないです。」
- ・「今現在、福島市に住み、時間も経ってくると、どうしても放射線のことを忘れてしまいがちになり、これくらいなら大丈夫かなと、気がゆるむこともありました。そのことばかり考えていては子育てしていく私としての楽しみが減ってしまうような気がして……。でも、どんな環境でも子育てをしていく中身(何が子供にとって大事なのか)は変わらないんだと思い、震災前と変わらずなるべく今まで通りの生活をさせてあげようと思えるようになりました。(震災直後はとても神経質に接してしまっていたので……。)本音を言えば、まだまだ不安です。でも悲観的になりすぎず、今の状況とうまくつきあえるようになった気がします。」
- ・「忘れてはいけない事ですし、これからも立ち向かっていかなくてはならない問題ですが、思い出し、考え始めると、道が見えず、不安になります。私も、私の周りの方達も、最近は考えないようにしている様な気がします。」
- ・「時間が経過し、正直、今、様々な事がマヒしています。ほんの少し忘れはじめてもいます。考えても結論がでないとわかったからです。子供達には将来原発事故の影響なく元気でいられる事を願いながら……。今だ、自分なりに出来る事はやっています(食材・水……

等)」

ウ 特徴

情報は行動選択の前提となるから、正確な情報を把握することはアンケート対象者にとって重要なことである。原発事故や放射能に関係する情報は、子どもの健康に影響するだけに、もともと関心は高い。

しかし、アンケート対象者の多くは、情報不信を抱いている。その原因は、専門家の間でも意見が分かれていたり（情報内容の矛盾）、行政や東電を信用することができなかつたり（情報発信主体に対する不信）することにある。このような状況にある中で、情報不信を解消するのは容易ではなく、情報不信は根深い問題といえる。

8.2 情報の発信

福島の実状を広く知ってほしいという意見があった。

- ・「私たちは県外の人に福島の実状をもっともっと知ってほしい、ずっと不安を抱えて生きていかなければならない事、そして、どこに住んでいても、危険はあるのだという事、皆で一緒に考え、乗り越えていきたいです。」
- ・「現在、原発事故の事も忘れられているのではないかというぐらい、ニュース等も減ってきて、本当に実際どういう状況になっているかわかりません。今後どうなっていくのか不安は消えないと思います。」
- ・「私達は、この土地にずっと住んでいく身です。私達の中では何も終わってないのです。勝手に終わられても納得いく訳ありません。福島は（原発事故）忘れられてるような気がします。」
- ・「今現在体に問題が出ていないけれど、目に見えない恐怖と共に子供達、私達は生活しているのだという事を決して忘れて欲しくないと思います。」

- ・「避難している人、避難をよぎなくされている人も大変だと思いますが、福島県に残って常に放射能におびえながら苦痛な生活を送っている人がいる事も忘れないでほしいと思います。」

特徴としては、福島が忘れられていく不安を抱いている。アンケート対象者の大半は不安を抱えている。福島を忘れないでほしいという意見は、福島在住者にも外部の人にも等しく発しているメッセージであるような気がする。

9 賠償・補償

9.1 賠償

ア 賠償の打ち切りに対する不満、子どもの将来の損害に対する賠償

東電の賠償の打ち切りに対する不満や、子どもの将来の健康被害に対する賠償が適切になされるかという不安がある。

- ・「東電の賠償金も今回で、終了になります。しかし、これからもずっと、避難をしながら福島県で生活していかなければなりません。お金じゃなくても、なにか、生活しやすい環境を考えてほしいです。」
- ・「将来、子供達に万が一のことがあった時、事故との関連性がはっきりしない等で賠償・治療が受けられないということがないよう国にはお願いしたいです。」
- ・「賠償金ではとてもまに合わず、貯金もほとんど使いました。……福島に住むには今までよりお金がかかります。子供達が大人になるまでは、少額でも長く続く賠償金が必要だと思います。今までかからなかった経費について補償して欲しいです。子供達に健康被害が出た時は、全て必ず治して欲しいです！！きちんと元通りにして欲しいです。」
- ・「東電の対応にも怒りを覚えます。家を何度も洗浄し、畑や庭の土を取っても、その費用はどこからも出ません。学校の送迎でガソリン代

もかさみます。ママ友達と原発が話題に上がっても光が見えてこない悲しさと怒りで疲れてしまい、みんな避けている気がします。せめてセシウムの半減期までは保証していただきたい。」

- ・「東電の賠償金についてももっと声を上げる必要があると思います。時間とともに、まあいいやという雰囲気になってしまっただけとはいえないし、他県の人々にも私たちの苦しみは今も続いているということを伝えていかなくてはと思っています！自主避難者や保養を希望する人がいる＝福島は苦しんでいるということに他なりません。」
- ・「今までは、賠償金があったので県外に遊びに連れて行ってましたが、もう終わりとのことなので、これからは今までのようには行けなくなると思います。」
- ・「東電は、今回で精神的賠償を打ち切りと言っていますが、子供をもつ親にとっては、何も終わってはいません。事故後に産まれた子供達、そしてこれから産まれてくる子供達も被害者です。」

イ 賠償の対象、範囲の線引きに対する不満

実害に対し賠償されないことに対する不満や、賠償範囲の線引きに対する不満がある。

- ・「ただ1つ納得がいけないのは、賠償金のこと。会津地方に住んでいたのだから、郡山に住んでいる人たちの半分。もらえるだけでも・・・という思いはあるものの、住所が只見町だけで郡山にいる時間が長くても、同じ扱いにはならなかった。同じ只見町でも単身赴任等で住所が中通りの人たちは、中通りの他の方々と同じ。格差を感じました。一律で対応してほしかったな、と思います。追加賠償も。追加の期間は郡山に住んでいたのに、当時は住んでいないというだけで、外れています。」
- ・「基本的に線量が高いのに、私の所は特定避難には入りませんでした。近くの方は避難する家も提供されており、賠償金が毎月1人10~30

万円でてるのは不満ですよ。私達は借り上げもしてもらえず、賠償金が線量の低い人たちと同じ、全く納得できません。」

- ・「避難者には賠償の面やサポートの面で大きく保護されていて、うらやましく思う時もあります。もう少し、避難区域に指定されていないけど、放射能で確実に汚染されているのだから、そういう生活にある人達にも目を向けてほしい。」
- ・「避難している方達だけが保証されて避難したくてもいろいろな面で無理があって避難出来ない私達はこんなに原発に悩まれ苦しんでいるのに何の保証もされません。」
- ・「自宅の庭も、除染が遅いため自己資金で表土除去しました。高額の金額で除染しましたが、どこへ聞いても後での賠償はないとのこと。東電のオペレーターの対応も悪く、頭にきています。」
- ・「30キロ圏内の南相馬市、厚町区の方々の（普通に生活している人達）は、東電より、かなりの保償額があるのに、福島市内の線量が高いのにもかかわらず、保償額（賠償金）がまったく、ひくいこと。その差が納得いかない。」
- ・「私たち家族は、事故後4月に引っ越してきました。（その後9月まで私と子供は私の実家に行っていました。）なので、東電の賠償を受けられていません。事故が起こった時には、福島への移住も新しい仕事も決まっていた、仕方なく福島に来ました。賠償の中には、『その時』以外にも、これからの生活に対してのものも入っていると思います。でも、私たちの『これから』に対して、賠償はゼロです。私は『福島にいらなくていいんだよ』とされているような気がしてなりません。疎外されているように感じます。」

ウ 特徴

〈私は、家計負担の増加や精神的なダメージなどの有形無形の損害を被っている。この損害は、原発事故を受けての対処行動や不安によるものであ

り、賠償されて然るべきである。しかし、東電の賠償は、被害の実態に応じたものではない。もう賠償してくれないのか。〉東電の賠償打ち切りに対する不満など、挙げればきりが無いほどに指摘されている不満は、このような不安を表したものと考えられる。この不安は、家計負担の増加を補填できないという意識から、経済的な不安を増幅させる。経済的な不安が強くなれば、日々の生活を萎縮させるばかりでなく、家庭生活と、ひいては健康にも影響を及ぼしかねない。子どもに不自由な思いをさせることで心痛を受けている親も少なくない。

より深刻な不安要素として、次のことを指摘することができる。すなわち、〈すでに発生している損害についてさえ賠償されないのだから、将来子どもに健康被害が生じても賠償してもらえないのではないか?〉このような不安である。例えば、「きっと将来、健康に異常がでて、原発事故の影響だとは思って欲しいと思うのが心配です。今の少しの賠償金で全て片付けられてしまうんだろうと感じます。」という意見は、この不安を率直に述べている。のみならず、あきらめの気持ちさえ読み取れる。

9.2 社会保障

ア 子どもの健康

子どもの健康被害に対し、予防・発見・賠償・補償が適切に実施されることが望まれている。これについては、前記「子どもの検査」に挙げた意見のほか、次のような意見があった。

- ・「将来、子供達に万が一のことがあった時、事故との関連性がはっきりしない等で賠償・治療が受けられないということがないよう国にはお願いしたいです。」
- ・「現時点での子供達の内部被曝ばく量や、体内不良は把握できても今後成長の過程において何かしらの問題が出てきた時の国や東電の対応について明確にしてほしい!!」

- ・「子どもの健康モニタリングや治療、医療、半永久的に保障してほしい。」
- ・「子供が成長した時に、もし何か影響がでた場合の対応をしっかりして欲しい。その時、相談できる場所が確保されていることを望みます。」
- ・「子供達には将来長い期間健康調査や検査をしてほしいです。“この程度は問題ない”とか、“因果関係は認められない”とは言ってほしくないです。ほんの少しの異変にも対応し、一生に渡ってサポートしてほしいです。(金銭面含め) 子供だけでいいんです。」
- ・「甲状腺ガンに、子供がなってしまった時に国は、しっかり倍償してくれるのか、広島や長崎のひばくした人たちのようにひばく者手帳を発行してくれないのか、など将来を背負う子供達の事を国は全く考えてくれていないような気がします。」
- ・「東電でとりあえず今は賠償金を出していますが、長期的なものとして、がん健診など、無償で行ってくれた方が助かります。」

イ 家計負担

家計負担の増加を受けて、それに対する社会保障としての手当等が望まれている。

- ・「仮設など、家を無くした方々はもちろんだが、郡山でも、放射能の数値は高いし、子供もいるのに、もっと生活が楽になるような手当や賠償、保障があるべきと思う。」
- ・「福島市は原町など原発に近い市町村より放射線量が高いにもかかわらず、保障もなく、子供も今も外で遊べず、スイミングに週2回通わせ、ストレス発散させている状態です。室内の遊び場を作ってもらったところで、どこもいっぱい。家庭の都合で、平日は遠くまで行く事もできず、毎週末は県外に遠出。かなりの出費です。もう大人はいいから、県内の子供全員に子供手当みたくお金出してもらった方が公平

だと思う。」

- ・「親の努めとしてがんばっている事は“保養”です。お金がかかります。大変です。どうか線量の低い県で福島県の子供たちを救って下さるよう、サポートして頂けるとありがたいです。 * (例・高速道路無料化 ・公的施設 ・娯楽施設 ・etc.)」
- ・「育児手当を増やしてほしい。」

ウ 特徴

子どもの将来の健康被害に関しては、賠償などの事後の対応のほか、事前の予防・発見がより重要である。親は子どもの健康が蔑ろにされないことを願っているので、当然のリアクションである。いくつかの意見は、モニタリングなどの定期的な検査の必要性を指摘している。子どもの健康を思えば、それがより適切な措置である。

なお、家計負担の増加に対する手当を望む意見がいくつか見られる。確かに、無いよりは有った方が当面の経済的な不安は軽減される。しかし、本来は賠償によって対処されるべき側面もあるし、国民の「ガス抜き」に利用される恐れもある。

9.3 租税

原発事故後の租税負担に対する不満がある（前記「租税、公共料金」参照）。

特徴としては、固定資産税・住民税の不合理性、消費税増税の懸念がある。

9.4 対応全般

ア 行政の対応に対する不満

行政の対応に対する不満がある。例えば、対応の遅さ、不十分さ、不合理さ等が指摘されている。

- ・「家の中も本当に安全なのかも分からない状態で震災後、1年半以上たっているのに県や国、市などの対応もとくに町自体復興している感じがしません。正直対応の遅さにいらだちを通りすぎあきれさ感じます。」
- ・「国や東電、県・市の対応には全く納得いくものではありません。」
- ・「国や県・市などの対応が遅く、不満 また、除染や様々な対応への金の使い方にムダがある。もっと私たちの声を聞いて、いまやるべき対応の優先順位をきちんと立ててほしい。 」
- ・「原発事故が起きてから色々自治体が動いたりしてくれてるのは分っているのですが、それでも対応が遅いと思います。」
- ・「市町村ごとの対応の速さにばらつきがあり不安です。遅い市は何故遅いのか？不安と不満です。」
- ・「行政がすぐに動いてくれないのも準備期間だと思ってまっていたが子供に対して結局何も対応してくれなかったことを心底がっかりしている。」
- ・「昨年末、家の片付けに一時帰宅しましたが、駐車場のこけ、雨どい等は6マイクロシーベルトを超えていて、このような場所で子育ては無理だと実感しました。……線量が高いので避難区域に指定されないのか、県と市に何度も電話しましたが、『安全です。頭おかしいんじゃないのか！！』と暴言をあげられ、こんなひどい事言われてまで福島に残る必要は全くないと思いました。」

なお、市長個人に対する不満もあった。

- ・「今の福島では、市長も何もしないのに、しましたみたいな顔を

して、福島の人をあてにしませんよ。」

イ 東電の原発事故対応に対する不満

東電の原発事故対応に対する不満がある。例えば、除染に消極的、汚染水の流出等が指摘されている。

- ・「夫は自衛隊なので除線作業なども行きましたが、東電の口だけの対応にイライラしたと言っていました。2年が経つと言っても、何も変わりません。」
- ・「東京電力、大キライです。誠意がないし、ふるさとをうばわれた人の身になれ！と思います。休日返上で除染しに来いと思います。」
- ・「福島原発は今だに解決策もあまりなく難航中。汚染水が流出など・・・。」
- ・「東京電力からの賠償が金銭ばかりで誠意が感じられない。お金はいらないので除染を行って元の生活を送れるようにして欲しい。」
- ・「東電よりちょこちょこ賠償金が入ってきているが、その金があったら率先して福島県の除染をして欲しいものです。金だけもらっても話しにはなりません。」

ウ 原発事故を踏まえた原発の是非

原発事故の被害を体験し、原発の是非について否定的な見解を述べる意見があった。

- ・「1日でも早く廃炉にしてほしい。原発事故前のように、外で遊び、砂遊びでも好きな遊びをさせてあげたい。」
- ・「今は原発がないといつもの生活が出来なくなるかも知れないのがなるべく早く将来の子供たちのために次のエネルギーをみつけてほしいです。もう原発での犠牲をだしてはいけないと思います。」
- ・「お金よりも一番は安全で安心して住めることです。日本の原発事故がこれ以上起らないことを祈るばかりです。」

- ・「子供達のためにも脱原発を早期に願っています。」

エ 寄付金の使途に対する疑問

寄付金の使途に対する疑問を呈する意見があった。

- ・「募金されたお金は何に使われているのか、まったくわからない。目に見えて実感できない。」

オ 特徴

行政・東電とも、原発事故後の対応に対する不満が多く向けられている(ア、イ)。この不満は、〈原発事故のために生活のあらゆる面で不自由を強いられているのに、原状回復や補填がままならない状況を受けての不満〉であって、被害者にストレス・不安・不信感を生じさせる。

また、原発の廃炉を望む意見が見られた(ウ)。原発の是非は政策的な問題であり、一見すると生活環境や不安等とは関係がないようにも思える。しかし、今回のアンケートに記述された原発の是非に関する意見は、原発事故後の行政や東電の対応を自ら体験し、その問題意識を踏まえて指摘されたものである。すなわち、原発事故の影響は、事故後の行政・東電の対応次第で大きくなったり小さくなったりする。上記の意見は、〈行政・東電の対応が「原発を廃炉にすべき」と指摘しなければならないほどに「悪い」＝原発事故による影響があまりにも大きい〉ということを意味している。

10 健康

10.1 子ども

原発事故との因果関係は不明であるが、甲状腺のしこり(のう胞)、鼻血、被ばく、運動・体力不足、肥満、不眠、強度の不安を示す状態、ぜんそく、のどの痛み、発熱がよく指摘されている。

- ・「アトピーがひどくなりました。」
- ・「うちの子はダウン症で、もともと甲状腺が大きいと言われているので、そこに放射線がたくさん入りこんでるのではないかと心配です。」
- ・「子供の甲状腺エコーの結果、A2判定で嚢胞があることを知り、だんだん怖くなっていました。」
- ・「原発後、ぜんそくの用なせきも続いているので、子供なりにストレスなどもあるのではないかと思います。子供にとって外で思うように遊べないのは、やはりかわいそうです。」
- ・「私もそうですが3歳の娘が少し大きな地震だと不安で時々泣きそうになっています。私はどうきや手の震えが出ます。」
- ・「元々睡眠障害もあるため、母子共につかれやすかったり、体調が悪いのは地震の影響（原発事故後）だけではないと思います。」
- ・「娘（14歳）の首には水疱状の腫瘍ができました。」
- ・「子供が2才1ヶ月であの震災があり、今でも本人の精神的な面ではいろいろと影響があります。・どもりが突然始まった。（余震があった日はひどくなる） ・緊急地震速報の音に似ている音がなると敏感に反応し怖がる。」
- ・「長男（6才）は事故後から、度々多量の鼻血が出て本当に心配している。一度は50分ほどふき出すように鼻血が出て、救急車を呼ぶか迷ったほどでした。その後、病院へ連れて行っただが、はっきりした原因は分からず・・・。アレルギーかもという事でしたが、不安は全く払拭されません。」
- ・「甲状腺検査の結果、『20.0mm以下のう胞がある』とのこと。・・・家の中で過ごすことが多いせいか、体力の低下（なわとびなどで体を動かすと、くちびるが紫色になったり、呼吸がみだれるので）心配です。」
- ・「甲状腺検査の結果で、A2と長男が診断され、それはのうほうがあ

るが大丈夫との事でした。」

- ・「去年から下の子が気管支炎や肺炎を繰り返し入院を4回し、上の子もせきをするようになり、ぜん息と診断されました。それも、原発が関係しているのではないかと心配しています。」
- ・「長男(8才)は、外であそべなくなってから家の中にいるため、(ストレスもかなりたまっていました)食べたり、ゲームしたり、体を動かす事が少なくなり体重も増えてしまいました。今は少しずつ短時間外であそぶ様になりましたがこのままの体形ではひまんと診断されているのでなんとかしたいです。」
- ・「原発事故後子供の首(両方)にしこりを見つけました。左側が大豆ぐらいの大きさで右は大きさは分かりません。小児科の先生によるとリンパ腺の腫れによる物だからしばらくは消えないとの診断で薬を服用して様子を見ました今まだ消えてません。ホールボディカウンターや甲状腺検査も受けました。のうほうが見つかっています。」
- ・「子供のゲリ、夜泣き、かんしゃく、爪に出た黒い線、悪化した肌のしっしん・・・放射能が全て原因ではないかもしれないが、そうなのかもしれない。そこが相談できずにグレーのままモヤモヤしてるお母さんは、私だけじゃないと思う。」
- ・「3月11日から7月11日までに受けた線量が 私と子どもが2.2ミリシーベルト、主人が2.0ミリシーベルトでした。たった4ヶ月でこんなにも受けてしまっていて、健康に害がないのか不安です。」
- ・「県外へ子供3人をつれて避難をしました。……しかし、8才の子供が高熱をだし、一人で知らない所で泊まったこともないのに大学病院に入院した日のことが忘れられません。……8才、5才の子供はこちらに戻ってからしばらく頭痛や腹痛を訴えるので親としてとても心配になりましたが、現在は本当に時々になり楽しく生活を送れているように思います。」
- ・「長男が学校でひどいいじめにあい、何とか助けを求めましたが、学

校側は遊びとして対処してもらえず、そのうちに息子が心身症になってしまいました。……次男は甲状腺にしこりと、内部被爆していることがわかりました。」

- ・「一番上の息子と二番目の娘には、甲状腺検査で A2 (20mm 以下のうほうがある。再検査の必要なし) の検査結果が出たり、2 番目の娘の頭に、昨年 10 月頃より、円形脱毛症がみられたり、一番下の娘には、昨日、白髪 1 本みつけたり・・・と何かにつけ原発の影響を不安に思う日々が続いています。」
- ・「原発事故後、少しの間東京に避難し、家族が離れ離れになり、子供は情緒不安定になりました。子供を守らなければと講演会を聞きに行き、知識がふえればふえるほど、子供の行動に過敏になってしまい、子供も限界だったのか、具合が悪くなってしまい、もう福島に住んでいる以上は気にしないようにしようとそれから心は決めました。」
- ・「子供を他県の親の所へ避難させたが、私たちとは仕事で 1 ヶ月以上離れていた。しかし、子どもに虫歯ができてしまい、(今までは一本もなかったのに) 奥歯が抜けてしまった。中学校くらいまではえてこないとのこと。歯ならびにも影響すると医者から言われた。」
- ・「上の子 (7 歳) が事故後に頻繁に鼻血が出るようになってしまい、とても心配です。週に 4 回も出る週があったり、少なくとも事故の影響がないとは言えないので、不安で仕方ありません。」
- ・「福島県の甲状腺検査の結果で、A2 判定の人が多い。これは、今の所、比較データが無いためという理由で、正常とも異常とも言えないという現状。不安でなりません。」
- ・「上の子 2 人の 20mm 下のしこり or のう胞があるのに心配。事故後半年位、学校や親せき中鼻血の出る人が増えた。末っ子が原因不明の高熱が出て下がらなく入院。姉も同じく原因不明の白血球がきょうたんに少なく入院。(事故後 3 カ月) 同じ時期に 2 人同時入院」
- ・「最近娘の調査結果が返ってきて動揺しています。推定値ではありません

すが、4ヶ月で1.9ミリシーベルト被爆しているなんて思ってもいませんでした。」

- ・「子供達が、“のどが痛い”“具合が悪い”と口にするたびに放射線の影響では？とすぐに思ってしまう。」

10.2 親

不安、ストレスに起因するとみられる愁訴、体調不良がよく指摘されている。

- ・「私もそうですが3歳の娘が少し大きな地震だと不安で時々泣きそうになっています。私はどうきや手の震えが出ます。」
- ・「同居をしているので思うように自分の意見をその場で言う事が出来ず、震災後は笑った事はありません。私自身とても神経質になってしまい、よく具合が悪くなったりイライラして怒りっぽくなっていました。」
- ・「事故後1年間は、ここに書ききれないほど色々な事を考えました。将来の子供達への健康不安。偏見。避難しなくて良いのか。このままでいいのか……。政府への対応の不満。不信。事故後半年で、私自身7kgもへりました。」
- ・「私は、2番目の子を妊娠していた時、切迫流産で病院に入院、そこで地震を経験しました。主人は仕事で不在、上の娘は祖父母に預けていたため、子供が1番親を必要とし、不安であった時期に一緒にいてできませんでした。皆さんのように避難することもできませんでした。その頃メールで送られてきた娘の写メを見るたび、今でも涙が流れます。テレビで地震や原発の映像を見ると、やはり涙が流れます。これは、いわゆる PTSD というものではないのかな……。と思っています。今、現在、それでも精神的に不安定な状態にあるとは思っておりません。」

- ・「昨年夏休みは前半北海道へ、お盆に帰って親戚に顔を見せてすぐに関東圏にまた保養。そんな梯子保養をして夏休みが終わると、自分の体調や心身がほとんど疲れているタイミングで子供の発熱を貰って今までに無く不調に見舞われました。肩から背中・首が動かすと痛い、節々は熱がある時のような毒々しい痛みが数日続きました。」
- ・「震災の心労からくる精神障害で、やっとのこと見つけた産後初の社会復帰だった、好きな職場も病気により社会適応が出来ず、約1年程さらに貯金を切り崩しての生活。」
- ・「親の負担も大きく、母が帯状ほうしんになり、めまいで立てなくなってしまった。……保育所が閉鎖され、知り合いがだれもない核家族である中で、職場から、『みんな出てきて働いている、なぜでてこないのか。』と言われ、かなりつらい思いをした。『子どもが預けられない』と説明しても、『子どもを理由にするな。』と言われた。ガソリンのない中、なんとか親元へ子どもを送り、職場へ行くと、全員から無視された。本当につらくて、パニック障害になってしまった。本当に苦しかったし、今でもそのつらい気持ちがい思い出されると、呼吸が苦しくなり、ほっさが起きる。」

10.3 特徴

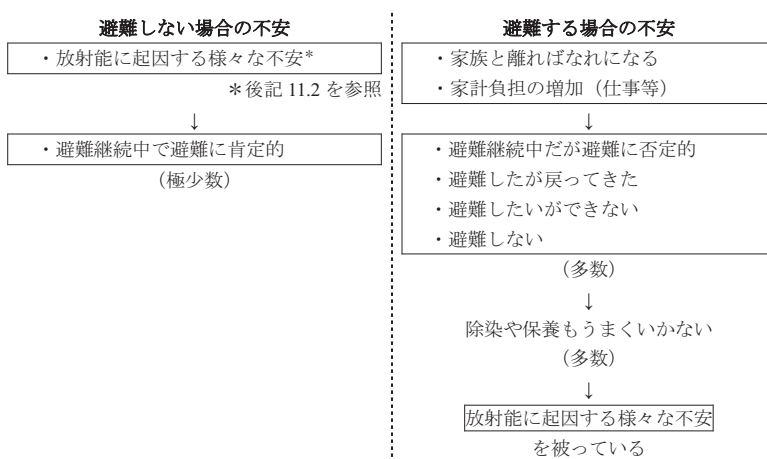
子どもに関しては、外遊びの制限が運動・体力不足、肥満、不眠に影響している可能性が指摘されている。運動機会の喪失・減少は、運動・体力不足の直接的な原因となるほか、肥満の原因ともなる。また自律神経の乱れから不眠の原因ともなるからである。子どもの不安状態は、家族（特に父親）と離れ離れになったことによる不安や、親の不安などが伝播している可能性がある。親に関しては、不安によってパニック障害などの健康影響が出ていることが伺える。

11 考察

本項では、8つの項目それぞれについて、概念図を用い、考察を行うことにしたい。

11.1 生活拠点

生活拠点が放射能に曝されているため、「避難」が検討されている。



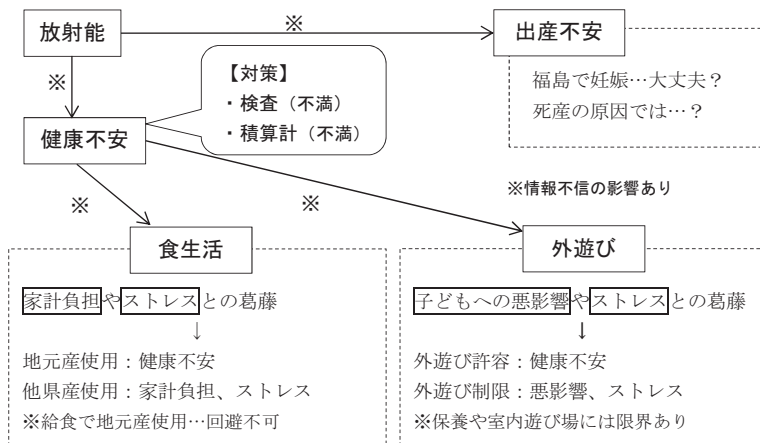
「放射能に起因する様々な不安」は、家庭により感じ方の程度に違いはあろうが、基本的には無視することができない程度の重みをもっているはずである。「家族と離ればなれになる」、「家計負担の増加」という精神的・経済的な不安がいかに重いものであるかがよくわかる。

「避難」がうまくいかないとなると、生活拠点の放射能を取り除くべく「除染」が検討される。しかし、除染は進んでいない。除染が実施された家庭にも不満が残っている。除染によって放射能のない生活を実現することは難しい。

「保養」については、それ自体一時的なものであるし、家計の負担も大きい。日々のストレスをある程度解消することはできるが、放射能をめぐる問題を抜本的に解消することはできない。

11.2 放射能に起因する様々な不安

(1) 子どもの健康



放射能による子どもの健康侵害を回避するため、地元産の食材を回避したり子どもの外遊びを制限したりすることが検討されている。

ア 食生活

他県産の食材や水を購入する家庭が多い。この場合、家計負担の増加や食材選びのストレスが重くのしかかってくる。終わりが見えない不安もある。

一方、家計の圧迫に耐えられず地元産の食材を使用したり、学校給食に地元産の食材が使用されたりする場合がある。選択の余地がなく、健康不安を強いられている。

イ 外遊び

外遊びをさせれば健康不安があり、外遊びを制限すれば運動能力や人格

形成に悪影響が生じる不安がある。一方の選択をしても他方の不安は残り、葛藤は続く。

逃げ道としては保養や室内遊び場があるが、相当の費用が必要で日常的に利用することができない。また、室内遊び場は、自然に触れることができない等の意味でも外遊びの代わりにはならない。

ウ 検査

いずれにしても、子どもの健康不安を完全に解消することはできない状況にある。そのため、子どもの検査に対する要望は多い。

もっとも、すでに行われた検査の方法等に対する不満から、検査の信用性に疑問が生じている。これが子どもの健康不安を増長させているところもあり、本末転倒である。

検査を適切に行い、そのプロセスや結果について可能な限り説明を尽くすという当たり前のことが求められている。

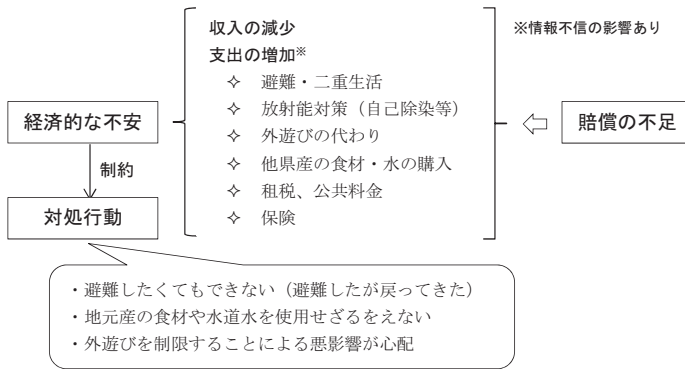
なお、日常的な放射能対策としては、可能な限り被ばくを避けたいはずである。現に、積算計よりも線量計を必要とする意見がある。

エ 胎児の健康

子どもの健康に類似する不安として、出産に関連する不安（胎児の健康不安）がある。福島で妊娠したり妊娠中を過ごしたりすることの不安は、「避難」に関する葛藤と類似するものがある。

これに対し、放射能が流産（死産）の一因となっている疑念を払拭できないという不安は、対処のしようがない。科学的に因果関係が存在しないという説明を受けても、本人の抱く疑念は残るからである。

(2) 経済状況



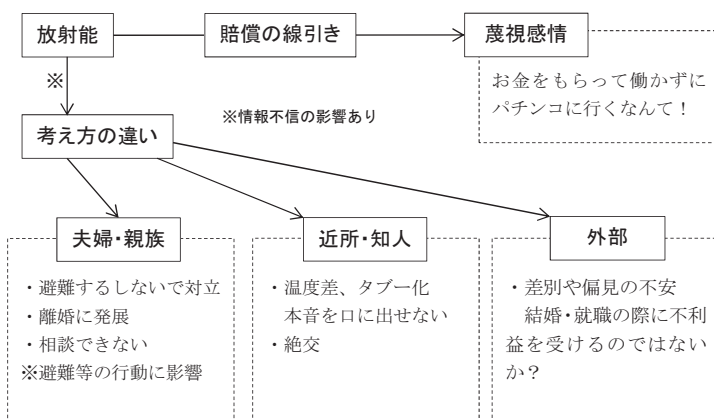
何事も先立つものがなければ実行できない。避難したり毎日の食材を高額なものにしたりするには経済的なゆとりが必要となる。

そこで経済状況をみると、原発事故に起因する支出の増加は顕著であるが、それに対応する賠償はなされていない。中には収入が減少した家庭もある。支出の中には一回的なものもあるが、食材費のように継続的なものもある。今後、賠償の見通しはない。消費税は増加する。経済的な不安は増すばかりの状況である。

このような状況の下では、避難したり他県産の食材を購入したりすることが制約されてしまう。現に、避難したくても家計の事情で避難できない家庭、避難したが家計の事情で戻ってきたという家庭、家計の事情で地元産の食材や水道水を使用せざるをえない家庭が存在する。

現に制約されないまでも、子どもの健康不安に加え、経済的なゆとりがない中で無理な生活を続けることによる不安を持ち続けることで健康を害する危険性がある³。また、親のストレスが子どもに伝播し、子どもの成長や健康に悪影響が及ぶ危険性もある。

(3) 人間関係

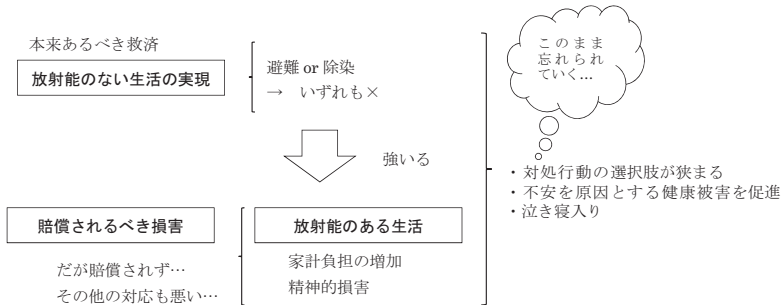


「外部」の「差別や偏見の不安」は顕著である。結婚の際に相手方やその親から「福島出身者」ということで断られるのではないかと、就職の際に会社等から「福島出身者」ということで断られるのではないかと、という不安は子どもの幸福にかかわることであるから、「子どもの健康」に準じて重要視されているものと考えられる。

「夫婦・親族」関係では避難等の選択決定が不可避であり意見の対立が生じやすい。関係悪化に発展している家庭もある。避難等の選択決定に影響している場合もある。これに対し、「近所・知人」関係ではその関係悪化を懸念してかタブー化が生じている。本音で語り合うことができず、不安を和らげることができないでいる。

「賠償の線引き」に対する不満は一定数ある。しかし東電や行政に対する不満にとどまらず、賠償の恩恵を受けている人に対して差別的な感情をもつに至っている人が少なからず存在する。相手方の人格を傷つけるだけでなく、自己の人格形成にも悪影響を及ぼしている。

(4) 救済



抜本的な救済方法は、放射能のない生活を実現することである。しかし、「避難」は自主的なものに委ねられており、「除染」も進んでいない。

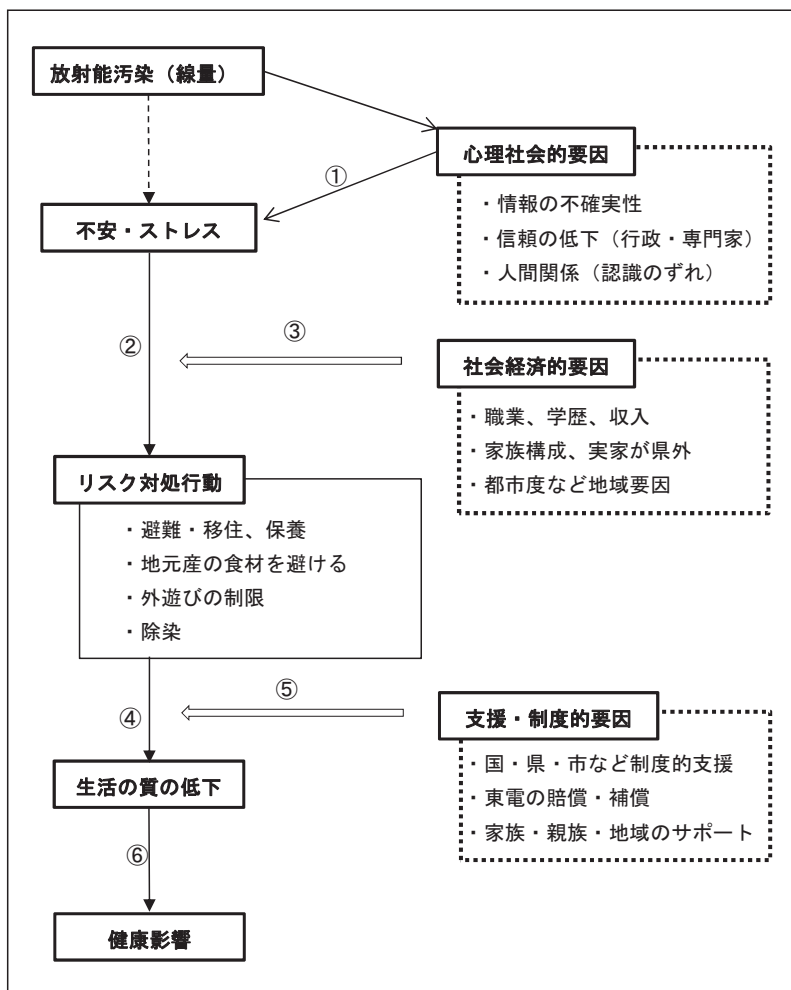
そうすると、多くの家庭では放射能のある生活を強いられていることになる。したがって、それによる家計負担の増加や精神的な損害に対する賠償が必要となるはずである。賠償は抜本的な解決とはならないが、経済的な不安は和らぎ、対処行動の選択肢が広がったり、不安を原因とする健康被害を防止したりすることができる。

しかし、東電の賠償は、形式的な線引きによるわずかな金額のものがあつたのみで、事実上打ち切られている。これでは、対処行動の選択肢が狭まったり、不安を原因とする健康被害を促進したり、泣き寝入り¹になったりと、自分の力ではどうすることもできない人ばかりが犠牲を被ることになりかねない。このまま忘れられていくという不安から、福島の情報(現状)を発信することが望まれている。

また、賠償のほかにも、行政や東電の対応に対する不満が顕著である。この不満から原発を不要とすべきとする意見もある。万が一原発事故が起きたときは適切な対応が求められるはずである。それができないのであれば原発をやめるべきだ、という趣旨の意見であって、示唆に富む。

11.3 自由回答全体の関連図

原発事故により、福島県中通り9市町村の母子は、これまで暮らしてきた生活空間に放射能が降り注いだ。このことが母子のこれまでの生活を大きく変えるきっかけとなった。放射能が母子の生活変化をもたらしているが、その際、放射線量が高いか低いかといった点に加えて、放射能の健康影響をめぐる情報の不確実性が母子にとって大きな不安要因となった。例えば、放射能に関して、誰の、どの情報を信じればよいかわからないといった困った状況が発生したのだ。こうした状況は、行政や東京電力、医療関係者、専門家といった人に対する信頼が低下したことがその背景にある。また、放射能に関する考え方の違いや認識のずれが、母子の不安やストレスの源泉となった。こうした不安、ストレスに対して、避難・移住、保養、地元産の食材を避ける、子どもの外遊びを制限する、自ら除染を行うなどのリスク対処行動をとった。ただ、仕事や経済的なゆとり、知識といった社会経済的要因、家族構成、実家が県内か県外か、家族や周囲の理解、都市度などの地域要因が関わって、放射能に対する対処の仕方に違いが出てくる。これにより、母子の生活が変化し、生活の質が低下することとなった。また、様々な健康影響も発生している。こうした関連を単純化して図式化すると、下記のようなになる。



1 ①について

放射能に起因する不安やストレスの増幅要因

(1) 情報の不確実性

- ・「国も県も市も『安全』とばかり言いますが、何を根拠に言っているのか分かりません。だから信じていません。数年後福島の子がどうなっ

ているのか、とにかくそれだけが不安です。」

- ・「原発事故で出たセシウムなどの事で、子供に対し、国、県、市などにきくと、同じ答えがなく、いったい何が正しいのかが分からずよくに不安になります。きちんと、正しい答えがほしいです。」

(2) 人間関係

- ・「放射能が安全かそうでないか、夫と夫の両親との認識のズレがあり、とてもつらかった。実家の両親は私と同じ認識だったため、たびたび実家へもどっていた。子どもが保育園に行っていないこともあり、身近に“ママ友”といえる人もなく、気軽に放射能のことを話せる機会がなく、ネットで調べては行き詰まる日々を過ごしていた。 原発事故から約一年後、市で放射能の不安から外遊びができない親子のためのお遊び会と親のための臨床心理士による相談会が実施され、そこで一歩脱皮できたと思う。臨床心理士さんによれば、放射能の“ここからが安全、ここからはダメ”(たとえば、 $0.2\mu\text{Sv/h}$ 以下なら外遊びOK、それ以上はダメ)と、「自分のものさし」でもって決めていくと、楽につきあえる、とのことで この言葉に非常に救われた。 同じ頃、地元のテレビ番組である学者の放射能の話聞き、やっと信じられる、安心できる話が聞けて、今でもその人の言葉を頼りにしている。

それでも時々「やっぱり危険だ」という情報を耳にすると落ちこんでしまう。私の住むところもホットスポットがあったり 全村避難した飯舘村の隣ということで「〇〇に住んでいる」と言うと 「大丈夫なの？」と言われるのがっかりというかなんともいえない気持ちになる。」後半は①に関係

2 ②について

不安・ストレスに起因するリスク対処行動

(1) 避難

- ・「県外に避難しています。やはり福島で子育てをするのはまだ不安を

感じます。家計は苦しくなりますが後から後悔したくないと思い避難を決めました。この子が1年生になるまでは県外にいる予定です。その後は様子をみて決めようと思います。」

(2) 除染

- ・「事故後、うちは自営で建築業ということもあり、家を高圧洗浄で洗い、家の前の庭は土を入れかえてコンクリートをうちました。また、原発後、飲料水はずっと買い続けています。金銭面でも税金等の免除などしてくれるといいなあと思います。」

(3) 保養

- ・「最近になって、市で除染（住宅地）と言っていますが、除染をしても震災前の安全で安心して暮らせる地にはもうなれないと思ってしまっています。目に見えて、国、東電、県が福島県の子供達の為に動いてくれる事を願うばかりです。そしてこれ以上、浴びさせないように、親の努めとしてがんばっている事は“保養”です。お金がかかります。大変です。どうか線量の低い県で福島県の子供たちを救って下さるよう、サポートして頂けるとありがたいです。 *（例・高速道路無料化 ・ 公的施設 ・ 娯楽施設 ・ etc.）」

(4) 食生活

- ・「食生活では、安全とは言われても、あれば、高い値段でも、他県の商品を買い求め、水（飲料水）は、いつも買い求めている。うちのような、母子家庭で、収入の少ない家庭では、大きな問題です。でも、子どもの健康を考えると、買わざるをえないし、やはり、将来がとても心配。もし、病気になったときに、こうかいしたくない……。あの時、ちゃんとしていればと……。」

(5) 外遊び

- ・「日々、放射能が心配です。外遊びもしていません。子供の体力低下がとても不安です。体力も落ちていて、すぐ疲れてしまいます。」

3 ③について

リスク対処行動の障害となっている要因

(1) 避難

- ・「避難したくても出来なかったことを悔やしく思う気持ちもあれば、いざ避難した所で、旦那と離れる事の不安、お金の不安もたくさんあり、食欲もなくなるほど考えてしまいずっと福島にいました。」
- ・「避難したくてもお金ない。小さい子を抱えて、不安でいっぱいなのに、避難するお金がない。生活ができない。たすけて 避難したくてもできない」

(2) 除染

- ・「除染もっと早くやって欲しいです。私達が住んでいる所は、市の除染の順番では早くても3年後と言われました。個人で除染出来る範囲もたかがしれています。そんな環境でどうして子供を外で遊ばせるのでしょうか？」

(3) 保養、遊び

- ・「定期的に保養に出したいと考えてはいますが、受けいれ団体もだんだん少なくなり費用も私達にとっては高額になってきました。」
- ・「もっと無料で、利用できる保養所や施設を増やしてほしい。交通費や駐車場料金を考えるとあまり利用できない。とにかく、不安や、ストレスが解消され、健康で、元気に育ってほしい。」

(4) 食生活

- ・「本当は安い福島県産かいきたいけど、小さい子供には不安。なので高い他県の物をかうが、経済的に苦しいので、半分は地元産。うちの子は、他より早く死ぬんだ、たぶん。」
- ・「学校給食にも福島県産米を使用することとなり、家で一生懸命県外産の野菜や肉、水もミネラルウォーターで内部被爆を防ごうとしてきたのに、どう頑張っても福島県に居る限り、子供たちの被爆は止めようもないのです。」

4 ④について

リスク対処行動に起因する生活環境の悪化

(1) 避難

- ・「事故直後は、新潟や山形へ避難しましたが、……福島にのこると私はきめました。子供が山形の小学校へ入学しましたが、毎日、福島にかえりたい、父親、みんなのいる場所へかえりたいと毎日、泣きながらうったえてくる娘をみていると私まで泣く日々。それをみて、どうようする弟達の顔。娘が、『お外であそべなくても、がまんしますから、なんでも、気をつけてくらすから、かえろうよ』と1年生の子供が泣いてうったえる姿を、東電のバカどもにみせてやりたかったです。福島に帰るときめ、今は福島に住んでいますが、もう回りの方は、ほうしゃのうの話はしません。その理由は、いつまでたっても何もしない国、東電にあきれてなきねいりしてるからです。……」

(2) 保養

- ・「週末は、子供達を外で元気に遊ばせたいと思い、私は以前の職場を辞め、土曜日も休みの所を探し、転職し、なるべく県外に行くようにしていますが、毎週だと、出費もかなり多く、毎日の生活をきりつめての生活です。」

(3) 食生活

- ・「水や米、野菜は全て県外のものを使う。家計が以前より負担が増えた。母親のストレスが増えた分、きっと子供たちに何らかの精神的負担をかけているはず。」
- ・「震災前は、祖母が作った野菜や米をもらって食べていましたが、原発事故後は、祖母にも、『いらないから。』と言って、もらっていないので、祖母にも悪いなと思うし、一番は、県外の高めの野菜や米を買っているんで、家計的にも悪い。祖母は84才で、野菜作りを楽しみとしていたので、今、その趣味を奪われて、かわいそう。ボケてしまうんじゃないかと心配だ。」

- ・「福島は特にこれといって特産品はなかったが、近くに山や川、湖や海があり、四季それぞれにそこでとれる物、又果物や野菜が新鮮でおいしかったのだが、事故以来、その楽しみがすべてなくなってしまった。まわりは本当に自然豊かなのにそこで自由に遊んだり、食べものを作るのもむずかしい。家を除染した土でさえ、自宅に置かなければならない。」

(4) 外遊び

- ・「砂遊びがしたい年齢なのに、今ではめったにできずとてもかわいそうだと思います。外遊びの時間も限られていて、少しでも風が強ければ、砂が舞うからと室内で遊ぶしかありません。家の庭で遊んでいても、砂や草花を触ったり、口に入れてはいないかと常に目を見張っています。来月で2才になる子供もいるのですが、砂あそびをしたことがほとんどありません。とてもかわいそうです。子供時代に自然にたくさんふれることができないのが悲しいです。昨年、保育園に他県から『いちょうの葉』が送られて来ました。うれしい反面、そういうことでしか草花にふれられないのかと思うと涙が出ました。私の住んでいる地域は放射能が低いので、周り（東電など）からは軽く見られています、実さいはいろいろと気を使っていますし、不安だってあります。お金の問題ではありませんが、今回で補しようが終わりというのも納得行きません。原発事故のせいで何度他県に遊びに言ったことか……。収入は減っても出費は増えるばかりだし。ほんとうに東電が許せません。子供たちの自由を返してほしいです。もっと外で、毎日自由にあそばせたいです。子供の口から『放射のう』という言葉があたり前のように出てくることにも悲しさを感じます。」

5 ⑤について

リスク対処行動の弊害を防止する外的支援

- ・「東電の賠償金も今回で、終了になります。しかし、これからもずっと、避難をしながら福島県で生活していかなければなりません。お金じゃなくても、なにか、生活しやすい環境を考えてほしいです。」
- ・「避難したくてもできない人に、何の支援もないのはおかしいと思う。」
- ・「東電からの賠償金が2回で終了するのはおかしい。食材を気にしたり、他の安全な地域へのリフレッシュ、除染などで、費用は各家庭かなり負担になっていると思います。また、高速道路無料化やふくしまっこプロジェクトなども昨年3月に終了してしまったので、子どものためにもっと続けていって欲しいです。」
- ・「保養させたい、水を買いたい、スポーツを習わせたくてもお金や、支援がなければ出来る訳ないのです。」
- ・「補償金だけでなく、室内のあそび場の拡充などハードな面でもっと支援してほしいな。と思います。コストはかかるとは思いますけど・・・。」
- ・「他県の方に知っていただきたいのは、震災を忘れないことが一番の支援だということ。」

6 ⑥について

生活環境の悪化に起因する健康影響

(1) 子ども

- ・「原発事故後、少しの間東京に避難し、家族が離れ離れになり、子供は情緒不安定になりました。子供を守らなければと講演会を聞きに行き、知識がふえればふえるほど、子供の行動に過敏になってしまい、子供も限界だったのか、具合が悪くなってしまい、もう福島に住んで

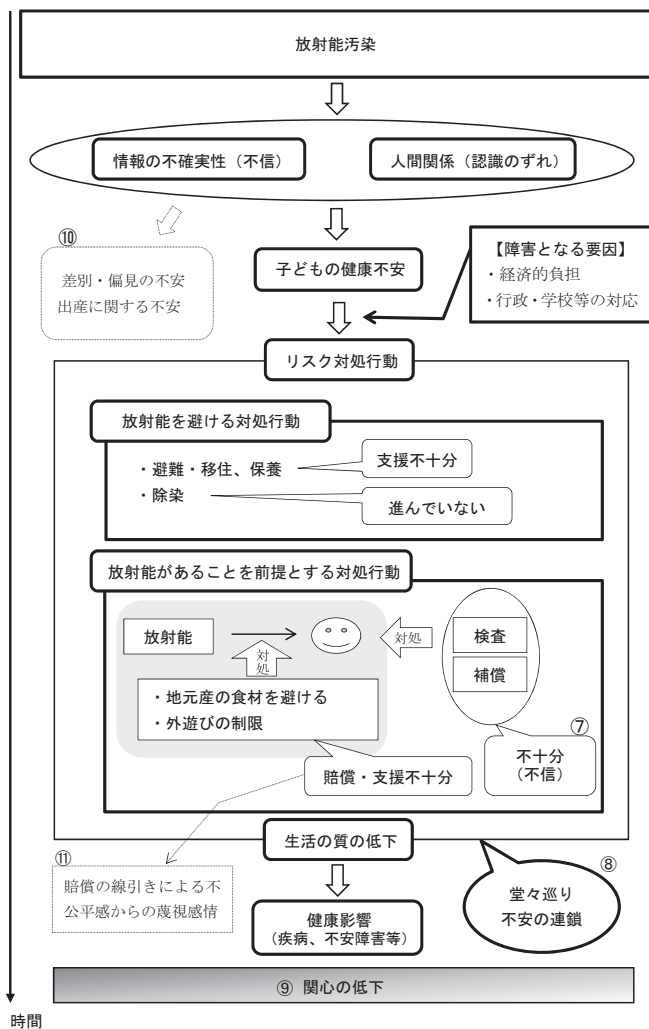
いる以上は気にしないようにしようとそれから心を決めました。」

- ・「事故前の『自宅の庭で遊ぶ』『近所の子供達との交流』『自宅近くの散歩』等、ささいな事が出来ない事を悲しく、また子供達をかわいそうに思います。体力もかなり落ちている様で、すぐに『疲れた』と言う様になりました。」
- ・「長男（8才）は、外であそべなくなってから家の中にいるため、（ストレスもかなりたまっていました。）食べたり、ゲームしたり、体を動かす事が少なくなり体重も増えてしまいました。今は少しずつ短時間外であそぶ様になりましたがこのままの体形ではひまんと診断されているのでなんとかしたいです。」

(2) 親

- ・「私の地域は、地震での被害は他に比べそれ程多くなかった事もあり、放射能汚染での心労が大半です。農家でもあり、食に関しては、とても悩み、私はノイローゼぎみです。“大丈夫”と言われる数値であっても、心から信用できない自分があり、不安でしかたがありません。周りは、自分と同じようには感じておらず、自分だけが不安で、無駄な心配をしているとバカにされる気分にもなり、頭がおかしくなりそうで、不安をのみこんで考えないようにもしています。」
- ・「子供達も、前の様に外遊びできなくなり、私自身も体調すぐれず、悪い事ばかり・・・でも、子供達の前では笑顔でいたいと心がけてます。」
- ・「震災から半年くらいずっと悩んで、寝不足やお酒の量も増え、それが原因なのか、左耳が聞こえなくなり、メニエール病と診断され、そのせいで、うつ状態になったこともありました。でも、玄侑宗久さんの「放射線の被害の大部分は心理的なものだ」という言葉に出会いとても救われました。左耳が聞こえなくなったのは、東電のせいでも震災のせいでもなく、弱い自分のせいだと気づいた時から少しずつ前向きに考えられるようになりました。今では耳の調子もだいぶよくな

り、福島で毎日快適に暮らしています。』



7 ⑦について

検査や補償の不十分さ、不信感

(1) 検査

不十分

- ・「甲状腺検査で数値が高い結果が来ても1~2年後までの検査まで問題無しと言うのが本当に大丈夫なのか。放置しておいてもいいものなのか。」
- ・「甲状腺等の検査を各市町村で行っていますが、常の不安にはかえられないと思います。もっと自宅で簡単に毎日数値をはかったり、甲状腺の様子を頻繁に調べられるものがあればある程度の不安は解消されるのではと思います。小さな子供がいる人はみんな不安だと思うので、その不安をできるだけなくしてほしいと思います。」

不信

- ・「昨年11月に子供の甲状腺エコーを受けましたが、保護者にはエコーの画面はいっさい見せず、エコー画像も1度も見ていません。結果は「A1」とか「A2」とか記載された書面のみ。全てにおいて不信感でいっぱいです。何を信じれば良いのかわかりません。「A2」判定（福島医大の山下先生から医療機関に断るよう通達を出しています。）でセカンドオピニオン受診希望しても県内のほとんどのhpは断るそうです。福島県民は被ばく者としてデータサンプルにされているとしか思えません。せめて子供達だけでも助けて下さい。」
- ・「先日、甲状腺検査の結果で、A2と長男が診断され、それはのうほうがあるが大丈夫との事でした。しかし親は、大丈夫だとはとうてい思えません。もう一度検査しようにも、自費で高い医療費を払い、基本的にはしないと言われました。うわさではどの病院も口裏をあわせているとの事。どの情報を信じればいいのかわからないのが現状である事を知ってもらいたいです。」

(2) 補償

不十分

- ・「日々不安な生活を送っているのが現状だと思います。一番は子供の将来の事、先の見えない不安があります。本当にこのまま、ここに住んでいて 大丈夫なのか、病気になってしまった時の、国や、東電の対応等、考えれば色々ありますが、今回の賠償金が終了みたいになっていますが、これから大人になっていく、子供達にどれだけお金がかかるか、わからない所で、まんがいち病気になって お金が必要な時に、治療や入院日、通院等もっともっとかかるのに 足りないと思います！！除染だって自宅はまだまだだし、個人でやりたくてもお金がかかります！！本当に、このままで良いのでしょうか」
- ・「事故からもすぐ2年がたちますが、未だに原発事故に併う出費（放射能除去に良いとされる食品や、県外産の米・野菜の調達、子供のために車で往復2時間かけて公園など移動をし、ガソリン代、一字疎開による二重生活など）で、いくら賠償金（家族全体で80万ほど）を受けとっても、震災前の貯金まで戻らないし、未だに赤字の生活。震災の心労からくる精神障害で、やっとのこと見つけた産後初の社会復帰だった、好きな職場も病気により社会適応が出来ず、約1年程さらに貯金を切り崩しての生活。現在も病気は落ちついたり再発したり。でも、生活していくために再出発して今に到ります。2年たった今でも、20msv(夫婦で除染する前)ある家の敷地内がある中、県や市の除染はやっとはじまったが、公共施設から先。うちはまだ。今は5msv くらいになりましたが、普通じゃない値ですよ。津波での被害のあった地域は、やり直しが始まっているのに、こんなに高い線量（ホットスポットなみ）でもグレーゾーン扱いの地域は、国や県からの補助、東電からの賠償も、市民の心労に比例していません。」

不信

- ・「きっと将来、健康に異常がでても、原発事故の影響だとは感じてく

れないと思うのが心配です。今の少しの賠償金で全て片付けられてしまいうndらうと感じます。」

8 ⑧について

八方ふさがりの状況

- ・「事故後、ママ達とよく集まり、色々な話をしました。泣きながら話し合いました。講演会にも行き、直接お医者様にもお話を聞くなど、不安を除く努力をしました。どんどん福島から友人、知りあいが出て行くことに、自分もできれば出て行きたいと何度も思いましたが、親、仕事においては行けないとあきらめて過してきました。誰と話してもいつも堂々巡りです。いまさら不安を語りあう場？必要でしょうか。もっと前向きな、もっと楽しくなるような、未来がキラキラするようなそんなことを望んでいると思います。」
- ・「福島に住み続けても、不安があるが、避難しても色々と問題が出てくると思うので、一体どうしたらいいのか、分からない状態が続いているので、精神的に不安になっています。」

9 ⑨について

関心の低下

- ・「震災があり、みんな不安を抱えて生活していますが、だんだんその生活に慣れてきて、あまり放射能を気にせず、外で子どもを遊ばせていたり、食べ物も気にせず県内産をどんどん食べています。」
- ・「自分自身もそうだけど、原発事故があってから月日がたち、放射能の事を忘れて生活しているような気がする。本当は国も一丸となって除染すべき。子供達をあまり外で遊ばせられなくて健康面が心配だけど、長男は震災後太ってしまい、スポ少でソフトをやらせたけど、線量も気にせず、外でずっと練習していて大丈夫なのかと不安になる事もある。」

10 ⑩について

子どもの健康不安以外のさまざまな不安

(1) 差別・偏見の不安

- ・「震災直後、風評被害が一番気になった。子供たちは震災をしっかり乗り越えたと思っていたが、うわさで『福島ナンバーの車に 帰れ!! とらく書きされたい』とか『放射能をもってくるな』とか県外の方から言われたと聞き、実際自分たちが県外に行った時、『福島』という言葉を出さない様にしていた。もし、子供たちが上記の言葉を聞いてしまったりした時、どう説明していいか、わからない・・・。」
- ・「一番は、子供達の将来、未来が閉ざされたものにならないようにと、ただただ願うばかりです。将来親元を離れ、県外へ行ったり、県外の人と知り合う機会は訪れるはず。その時に福島で生まれ育だったことに引気を感じたり負い目になったりしないか、偏見は持たれないか、傷つくことはないか、様々な不安が頭をよぎります。そうならない為に、私達はもちろんのこと、県外の子供達へ正しい知識と教育がなされることを願わずにはられません。」

(2) 出産に関する不安

- ・「私達は本当にここで生活していて大丈夫ですか？ローンの残る自宅を置いて避難はできず・・・でも将来、避難しなかった事を後悔する時がきたらどうしよう・・・子供が2人いる友達と妹、本当はもう一人欲しいけど、妊娠への不安が大きいって言っている。・・・疲れた。」

11 ⑪について

賠償で優遇されている人に対する蔑視感情

- ・「避難地域の人たちが賠償金をもらって生活しているのも少しずいと思う。福島の方が線量が高いところもあるし、たしかに家で生活できないのはかわいそうだと思うが、日中からゲームセンターやパチン

コ店にいるのはどうかと思う。仕事をした方がよいと思う。同じ福島人としてはずかしい。」

11.4 最後に

これまで紹介してきた自由回答の根底にあるものは、放射能被ばくによる子どもの将来の健康と差別への不安である。こうした不安は、原発事故後、福島県中通り9市町村の多くの母親に共有されている。決してすべての母親が放射能不安を共有しているわけではないが、多数の母親がその不安を口にしており、すでに現実的な問題として対処を迫られている。これは、明らかに原発事故以前にはなかった新しい事態である。また多くの母親が、不安を語っているだけでなく、放射能への対処行動をとっている。そうした意味において、放射能不安は社会としての取り組みが必要な社会的不安となっていることを指摘しておきたい。

付記

調査にあたって協力いただいた福島県中通り9市町村の親子ならびに後援をいただいた市町村・新聞社・団体の関係者にお礼申し上げる。また自由回答の入力ならびに分析作業をサポートしていただいた柴尾知宏、落合玲奈、井上美紀の各氏に感謝申し上げたい。本稿は筆者に加えて、阪口祐介、守山正樹、永幡幸司、高木竜輔、田中美加の各氏との共同研究に基づくものであり、科学研究費・基盤研究(B)「原発災害における母親のリスク対処行動の規定要因の探索と支援策についての研究」、同基盤研究(C)「災害ストレスに脆弱な母子に対する心理社会的支援とそのためのシステム構築」、2014年度中京大学特定研究助成「原子力市民防災学の構築：福島とチェルノブイリの教訓を未来へ」による成果の一部である。なお、福島子ども健康プロジェクトの研究目的、速報値、新聞報道などに関しては次のホームページを参照されたい。(http://mother-child.jp/healthwellness.

com/)

〔注〕

- 1 この調査において回答者の99.1%が女性である。子どもとの続柄で「母親」が回答したのは、98.7%である。その他、「父親」、「祖母」である。
- 2 子どもが差別や偏見を受ける不安については、子育てにおける不安に直接関連するが、対人的な側面を重視し、人間関係に分類した。
- 3 「食に関しては、とても悩み、私はノイローゼぎみです。」という意見は、その危険性が現実化している可能性がある。
- 4 すでに発生している損害についてさえ賠償されないのだから、将来子どもに健康被害が生じてでも賠償してもらえないのではないか、という不安、さらにはあきらめの気持ちが生じている。

〔文献〕

- Adams, R.E, E.J.Bromet, N.Panina, E.Golovakha, D. Goldgaber and S. Gluzman, 2002, "*Stress and well-being in mothers of young children 11 years after the Chernobyl nuclear accident*", *Psychological Medicine*, 32 : 143-156.
- 朝田隆, 2012, 「災害後の心の支援システムの構築と災害精神支援学の創生」, 『精神神経学雑誌』 114 (3) : 227-232.
- Baker, Earl J , 1991, "*Hurricane Evacuation behavior*", *International Journal of Mass Emergencies and Disasters*, 9 (2) : 287-310.
- Barton, Allen H, 1969, *Communities in Disaster: A Sociological Analysis of Collective Stress Situations*, Garden City, New York : Doubleday. (= 1974, 安部北夫訳, 『災害の行動科学』 学陽書房.)
- Branshaw, John and Joseph Trainor, 2010, "Race, Class and Capital Amidst the Hurricane Katrina Diaspora", David L. Brunsma, David Overfelt, J. Steven Picou eds., *The Sociology of Katrina: Perspectives on a Modern Catastrophe*, Rowman and Littlefield Publishers Inc, 91-105.
- Bromet, Evelyn J, 2011, "*Lessons Learned from Radiation Disasters*", *World Psychiatry*, 10 (2) : 83-84.
- , J.M. Havenaar and L.T. Guey, 2011, "*A 25 Year Retrospective Review of the Psychological Consequences of the Chernobyl Accident*", *Clinical Oncology*, 23 (4) : 297-305.

- Cutter, Susan R and Kent Barnes, 1982, "*Evacuation behavior and Three Mile island*", *Disasters*, 6 (2) : 116-124.
- , J. Voruff Bryan and Lynn Shirley, 2003, "*Social Vulnerability to Environmental Hazards*", *Social Science Quarterly*, 2003, 84 (1) : 242-261.
- Dauglas, M and A. Wildavsky, 1983, *Risk and Culture: An Essay on the Selection of Technological And Environmental Dangers*, Berkeley : University of California Press.
- Erikson, Kai T, 1976, "*Loss of Communitality at Buffalo Creek*", *America Journal of Psychiatry*, 133 (3) : 302-305.
- , 1991, "*Radiation's lingering dread*", *The Bulletin of the Atomic Scientists*, 34-39.
- , 1994, "*A new species of trouble*", W.W.Norton & Company, New York-London.
- ギル・トム, 2013, 「場所と人の関係が絶たれるときー福島第一原発事故と「故郷」の意味」トム・ギル・ブリギッテ・シテータ・デビッド・スレイター編『東日本大震災の人類学ー津波、原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, 201-238.
- 直野章子, 2011, 『被ばくと補償——広島、長崎、そして福島』平凡社.
- Havenaar, Johan M, Julie G, Cwikel and Evelyn J. Bromet, eds., 2002, *Toxic Turmoil: Psychological and Societal Consequences of Ecological Disasters*, Springer.
- , E.J. de Wilde, J. van den Bout, B.M. Drottz-Sjoberg and W. van den Brink, 2003 "*Perception of Risk and Subjective Health among Victims of the Chernobyl Disaster*", *Social Science & Medicine*, 56:569-572.
- 飯島伸子, 1985, 「第6章:被害の社会的構造」宇井純編『技術と産業公開』国際連合大学,
- , 1993, 『改訂版 環境問題と被害者運動』現代社会研究叢書, 147-171.
- , 1995, 『環境社会学のすすめ』丸善ライブラリー.
- 池田陽子, 2013, 「「汚染」と「安全」ー原発事故後のリスク概念の構築と福島復興の力」トム・ギル・ブリギッテ・シテータ・デビッド・スレイター編『東日本大震災の人類学ー津波、原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, 165-200.
- 石原邦雄, 2004, 『家族のストレスとサポート』放送大学出版会.
- 今井照, 2012, 「福島における生活再建をどのように考えるか: 原発災害避難者実態調査から」, 『季刊政策・経営研究』, 2: 41-69.

- 外傷性ストレス関連障害に関する研究会金吉晴編, 2006, 『心的トラウマの理解とケア』(第2版)じほう.
- 金子勇, 2011, 「環境破壊から社会の復興再生へ: 集団的ストレス状況の社会学的分析」, 『北海道大学文学研究科紀要』, 135: 89-137.
- Kirkbride, J.B., J. Boydell, G.B. Ploubidis, C. Morgan, P. Dazzan, K. McKenzie, B.M. Murray and P.B. Jones, 2008, "*Testing the Association between the Incidence of Schizophrenia and Social Capital in an Urban Area*", *Psychological Medicine*, 38: 1083-1094.
- 小西聖子, 2011, 「見通しを持ってずにさまよう被災者の心」『臨床精神医学』, 40 (11) : 1431-1437.
- Lifton, Robert J, 1968, *Death in Life: Survivor of Hiroshima*, New York: Random House. (= 2009, 榊井迪夫, 湯浅信之, 越智道雄, 松田誠思訳, 『ヒロシマを生き抜く: 精神的考察 (上) (下)』岩波書店.)
- Luhmann, N., 1991, *Soziologie des Risikos*, Walter de Gruyter. (= 1993, Barrett, R., trans., *Risk: A Sociological Theory*, New York: Aldine De Gruyter.)
- 松谷満・成元哲・牛島佳代・阪口祐介, 2014, 福島原発事故後における「自主避難」の社会的規定因—福島県中通り地域の母子調査から—, アジア太平洋レビュー, 12, (印刷中)
- ・牛島佳代・成元哲, 2013, 福島原発事故後の健康不安・リスク対処行動の社会的規定因, 中京大学現代社会学部紀要, 7 (1) : 89-108.
- ・牛島佳代・成元哲, 2014, 自治体別に見る福島原発事故後の意識と行動—福島子ども健康プロジェクト2013年調査報告, 中京大学現代社会学部紀要, 7 (2) : 151-174
- 盛岡梨香, 2013, 「立ち上がる母—受け身の大衆とマヒした政府の間で戦う女性たち」トム・ギル・ブリギッテ・シテータ・デビッド・スレイター編『東日本大震災の人類学—津波、原発事故と被災者たちの「その後」』人文書院, 239-268.
- Neria, Yuval, Sandro Galea and Fran H. Norris, eds., 2009, *Mental Health and Disasters*, Cambridge University Press.
- Norris, Fran H, Melissa Tracy and Sandro Galea, 2009, "*Looking for resilience: Understanding the longitudinal trajectories of responses to stress*", *Social Science & Medicine*, 68: 2190-2198.
- 太田保之・三根真理子, 2012, 「長崎市の原爆被爆者における長期経過後の精神的影響」, 『精神医学』54 (9) : 871-880.

- Picou, Steven J, Brent K. Marshall and Duane A. Gill, 2004, "*Disaster, Litigation and the Corrosive Community*", *Social Forces*, 82 (4) : 1493–1522.
- Raphael, Beverley, 1986, *When Disaster Strikes : How individuals and Communities Cope with Catastrophe*, New York: Basic Books, (=1989, 石丸正訳, 『災害の襲うとき：カストロフィの精神医学』みすず書房.)
- and P. Maguire, 2009, "Disaster Mental Health Research: Past, Present, and Future", Y. Neria, S. Galea and F.H. Norris, eds., *Mental Health and Disasters*, Cambridge University Press.
- Rubin, G. James, Richard Amlot, Simon Wessely and Neil Greenberg, 2012, "*Anxiety, Distress and Anger among Nationals in Japan following the Fukushima Nuclear Accident*", *The British Journal of Psychiatry*, 201 : 400–407.
- 斎藤環, 2012a, 『被災した時間：3・11 が問いかけているもの』中公新書.
- , 2012b, 『原発依存の精神構造：日本人はなぜ原子力が「好き」なのか』新潮社.
- Sampson, Robert J, 2012, *Great American City: Chicago and the Enduring Neighborhood Effects*, Chicago: The University of Chicago Press.
- , 2003, "Neighborhood-level Context and Health: Lessons from Sociology", I. Kawachi & L.F. Berkman, eds., *Neighborhoods and Health*, New York: Oxford University Press.
- , S.W. Raudenbush and F. Earls, 1997, "*Neighborhoods and Violent Crime: A Multilevel Study of Collective Efficacy*", *Science*, 277 : 918–924.
- Sorokin, Pitirim A, 1942, *Man and Society in Calamity*, Dutton, (=1998, 大矢根淳子訳, 藤田弘夫解説『災害における人と社会』文化書房博文社.)
- 成元哲、2014、放射能災害下の子どものウェルビーイング—福島原発事故後の中通りの親子の生活と健康調査から、東海社会学会年報、6：7–24.
- ・牛島佳代・松谷満・阪口祐介、2014、放射能災害下の子どものウェルビーイングの規定要因—原発事故後の福島県中通り9市町村の親子の生活・健康調査から—、環境と公害、44（1）：41–47
- ・牛島佳代・松谷満、2013、終わらない被災の時間—原発事故後の福島県中通り9市町村の親子の不安、リスク対処行動、健康度、中京大学現代社会学部紀要、7（1）：109–167.

- ウルリッヒ・ベック・鈴木宗徳・伊藤美登里編, 2011, 『リスク化する日本社会
ウルリッヒ・ベックとの対話』岩波書店
- 牛島佳代・成元哲, 2013, 育児支援ネットワークと母親の健康に関する日韓比較研究、中京大学現代社会学部紀要、7 (1) : 59-88.
- ・成元哲・松谷満, 2014, 福島県中通りの子育て中の母親のディストレス持続関連要因—原発事故後の親子の生活・健康調査から、ストレス科学研究, 29 (印刷中).
- van den Berg, Bellis, Linda Grievink, Joris Yzermans and Erik Lebre, 2005, “*Medically Unexplained Physical Symptoms in the Aftermath of Disasters*”, *Epidemiologic Reviews*, 27: 92-106.
- 和田明・國井康人・松本純弥・板垣俊太郎・三浦至・増子博文・矢部博興・丹羽真一, 2011, 「原子力発電所事故後の福島県における精神科新入院の状況」『臨床精神医学』40 (11) : 1423-1429.
- 吉岡棟憲, 2011, 2012, 『原発事故さえなければ通信』第1号, 第2号, 第3号, 第4号.
- 山川充夫, 2013, 「原子力災害にとふくしま復興の苦悩」『学術の動向』18 (2) : 52-7.
- Vyner, M. Henry, 1988, *Invisible Trauma : The Psychosocial Effects of Invisible Environmental Contaminants*, Lexington : Lexington Books.

